麻原彰晃の世界 PART12

真理仏教 十二縁起

魂の落下と上昇のプロセス

麻原彰晃尊師説法 質疑応答

麻原彰晃

麻原彰晃の世界 PART12

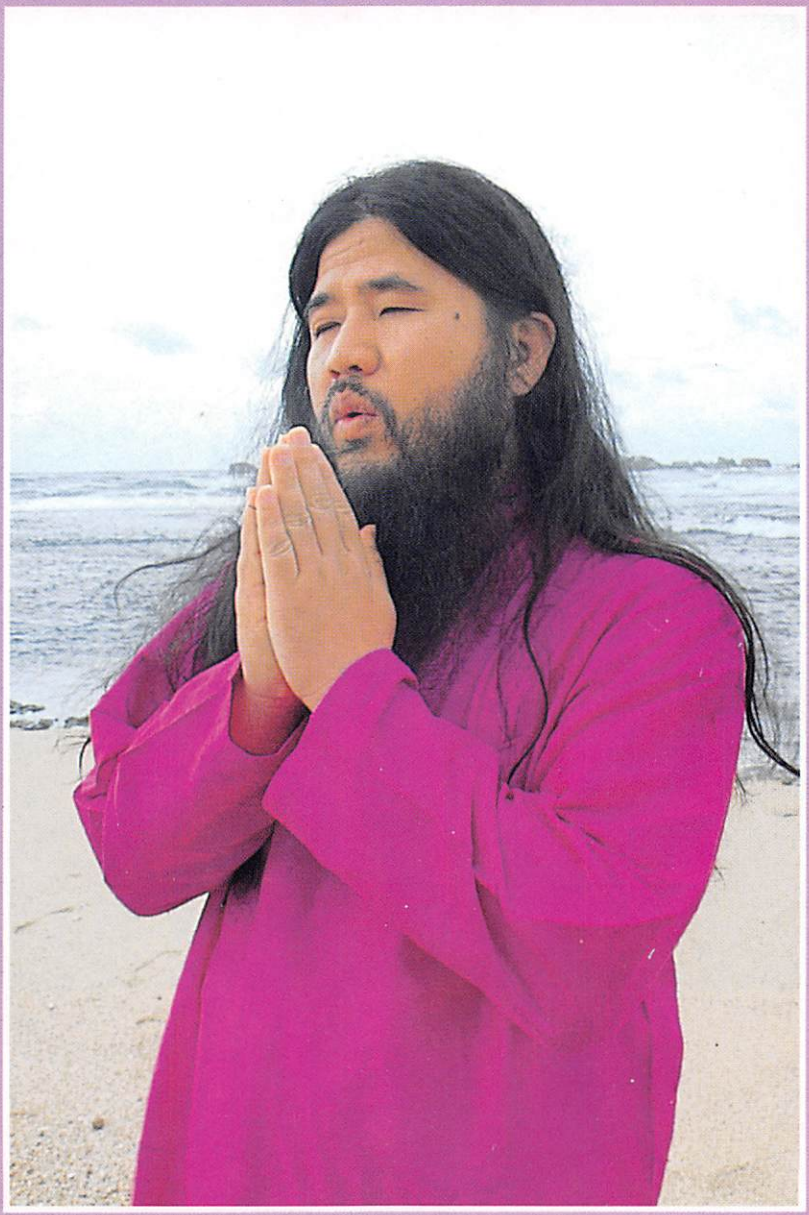
魂の落下と上昇のプロセス

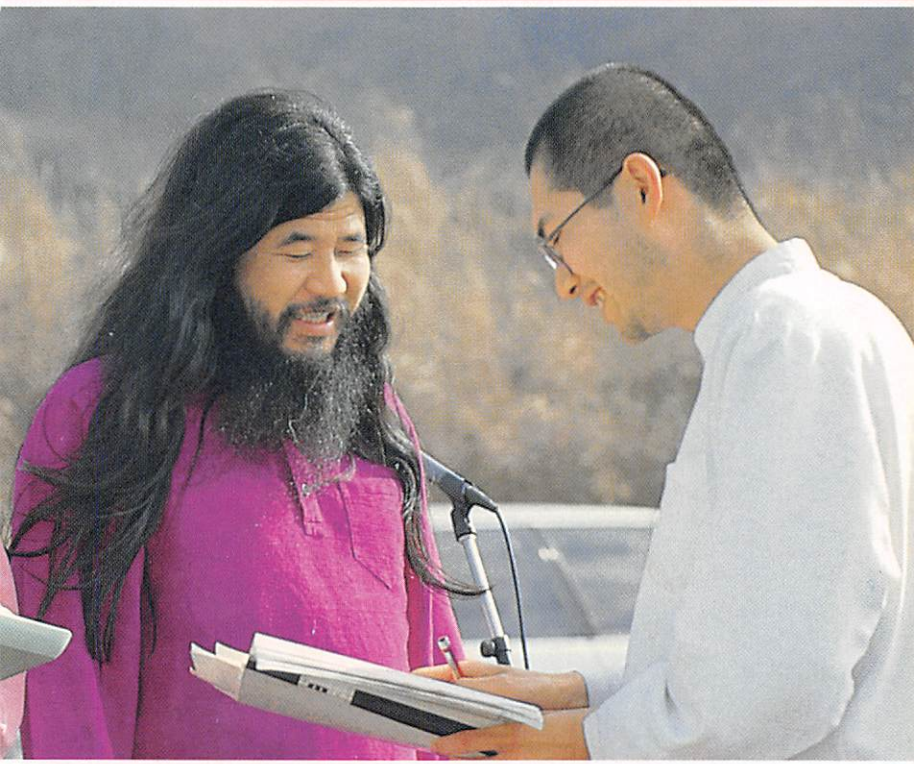
仏教真理

十二縁起

麻原彰晃尊師説法　質疑応答

麻原彰晃





はじめに

人間ならだれしも一度は考えたことがあるであろう、この世に生を受けた理由。なぜ生まれてきたのか。何のために生きているのか。死んだらどうなるのか……。

その回答を明解に説き明かしているのが、サキャ神賢（釈迦牟尼）が初転法輪でお説きになった「十二縁起の法」である。魂が、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の真我独存位の状態から落下し、そして最終的には絶対に壊れることのない至福の境地、マハー・ボーディ・ニルヴァーナに至るまで、すべての魂は模索の旅を続ける。

魂の落下と上昇のプロセス——今、人間である魂に限らず、様々な魂は、始まりとてない過去に、三グナと呼ばれる大変美しい光のエネルギーの干渉を受け、落下のプロセスを歩み始める。光だけが存在するコーザル世界から、微細な物質でできたアストラル世界を経て、我々が現在生きている、粗雑な物質でできている現象界に落ちてきたわたしたち。より良い環境を求め、それが迷妄の世界に引

きずり込まれることなのだとも知らずに求め続け、いまだにあれやこれやと模索をする無智なわたしたち。

しかし、いつの日か、それが苦しみであることを理解するようになり、わたしたちは、求める方向ではなく、逆に欲望を引っ込める方向へと思索を始める。

そこで徳のある魂は本物のグル（導師）に巡り合うことができ、信をもって修行を始める。そして、最終的には、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜のマハー・ボーディ・ニルヴァーナに到達するのである。

この落下と上昇のプロセスは、単なる哲学や一般的な神頼み宗教ではわかるはずもなく、激しい修行を成し遂げ、真実の瞑想体験をしたグルによってしか明快に説き明かされることはない。

どんなに外的な快適さを求めても、得られた瞬間は満足を覚えるかもしれないが、結局、欲望は欲望を生むこととなり、果てしない輪廻転生を繰り返す。「四つの絶対的真理（四聖諦）」にもあるように、すべての現象の裏には必ず苦しみが存在する。これが、この現象界の法則である。

早くその絶対の真理に気づかれ、魂の上昇のプロセスを歩んでいただきたいと思う。

なお、説法集に関しては、大部分を説法が行なわれた日付順に配列している。それは、現在、オウム真理教ではパーリ仏典を現代のわかりやすい日本語に直すための訳語の修正がなされており、混乱を避けるためである。その麻原尊師の深い叡智によって導き出された訳語に関しては、巻末に「言語対比表」として掲載しているので参照していただきたい。

この書を手にされた功徳のあられたあなたが、真理の流れに入られんことを願ってやまない。

一九九二年一月

オウム真理教広報編集部

麻原彰晃の世界 ❖ PART 12

仏教真理 十二縁起

——目次——

はじめに ——— 1

◆第一話 「魂の落下と上昇のプロセス」 ——— 8

◆第二話 「そして死を超越せよ！」 ——— 24

◆第三話 「十二縁起の実践的利用法」 ——— 42

◆第四話　「詳説・十二縁起の法」　65
◆第五話　「アストラル世界の浄化を」　79
◆第六話　「聖者の生き方」　100
◆第七話　「転生を見すえた修行の土台」　108
◆第八話　「四諦八正道と縁起の法」　122
◆第九話　「十二縁起の法のすべて」　137
質疑応答　184
言語対比表　192

仏教真理　十二縁起

◆第一話　絶対的な自由・幸福・歓喜の世界へ

「魂の落下と上昇のプロセス」

◉三グナの本質――すべては苦

それでは、今日の説法に入りましょう。今日は、四諦十二縁起の法について触れたいと考えています。

この四諦縁起の法というのは、仏陀釈迦牟尼が成道なさったときに発せられた、最も素晴らしいお経、教えの一つであると。この内容は何かというと、この現象界の要素、構成要素三グナ、ね、ラジャス、タマス、サットヴァといわれている三つのエネルギー、このエレメントは、総じて、すべては苦であると、苦に至るための要素であると。

では、なぜ苦に至るための要素なんだと考えたとしようじゃないか。ね。そうすると、それはどういうことかというと、三苦というものをこの三グナというものは構成しているんだと。はい、三苦というのは何だったっけ。まず第一は、一緒にいこうね、痛みとか心の苦悩とかいう本質的な苦、どうだこれは。そして第二番目は、今まで得ていた楽しみが崩れ去るときに生じる苦。そして三番目の苦しみは、そこに、それを得ればすごく楽になる、あるいは幸福になるわけだけど、得ることができなくて生じる苦。求めても、その求めたものが手に入らないという苦。この三つだね。いいですか。そして、その構成要素を三グナはつくっていると、ね。エレメントはつくっていると。いいかな。

よって、ね、まずこの世は苦であるという定義が生じると。そして、真我が、ね、ニルヴァーナから落下し、その三グナの干渉を受けたと、ね。そして行、ね——行というのは何かというと、身の行ない、口の行ない、心の行ないといった三つの行だね——この行が形成される、ね。それによって、わたしたちは苦を生起せしめるのだと。生起というのは何かというと、その苦が起き上がってくるん

だと。いいかな。

例えば、ここにある人がいて、彼の中に貪り(むさぼ)の心が生じたと、ね。そして、自分は優位な立場に立ちたいと考えたと。そうすると、例えば他の人とかとぶつかると、ね。もし貪りの心が生じなければ、他の人とぶつかる必要はないと。わかるかな、これは。よって、その苦の原因を生起せしめたのは、心の働き、身(しん)・口(く)・意(い)でいったら、ね、意の働きによって苦悩が生起しているんだと。わかるかな。

そして、君たちの苦悩そのものは、その三つの行ないのどれかの要素によって生じるんだと、ね。そして、当然苦というものは離れることによって、あるいは超えることによって、ね、滅尽することができるんだよと、ね。これをヨーガ的な言葉を使うならば、三グナからの干渉を受けなくすることによって、滅尽はできるんだよと。いいかな、これは。そして、その滅尽をなすための法、それは聖なる八つの正しい道である。これが八正道(はっしょうどう)だと。

◉正見――四諦を根本として

で、実は昨日、わたしは大阪へ行ってきたわけだ。それは、大阪のポアの集い、あるいは凡夫・外道をね、今オウムは多くの人に真理を知ってもらおうと、多くの人に入信していただいて真理を実践していただこうということで、あちこちでいろんな催しをやってるわけだけど、ね、その中の一つポアの集いというのがあって、そこへ行ってきたわけだけど。で、ある人が高橋信次の本をたくさん読んでいたと。で、

「わたしは、高橋信次先生の八正道というものを根本としていきたいと考えている」と。

はい、よく聞きなさいよ、これは、君たち。大切なとこだから。

「そうですか。ではあなたに質問しよう。あなたは現世において、出家をしないで八正道が行じられると思うか。」

「いや、それは思います。」

「あ、そうか。では、もう一つ質問しましょう。いったい、正見（しょうけん）とは何ぞや。」

「正しく見るでしょう。」
「そうか。じゃあ、その正しく見るとは何ぞや。」
――沈黙。ね。
でも、この正しく見るというのは、四諦にのっとって見る、これが正見だよね。わかるよね、言っていることは。つまり、この世は苦である。苦は必ず生起すると。そして、それは滅尽することはできるんだと。離れたり超えたりすればと。その超えたり離れたりする道、それが聖なる、ね、八つの道であると。いいね。
「じゃあ出家するしかないのか。」
「そうだね。」
そこで頭を抱えたと。面白いね、この人はね。八正道を行じたいといって、それで出家するしかないのかと、頭を抱えたと。ね。
つまり、正見というのは、そのような目で見なさいよということだ。

◉真我の落下――身・口・意のけがれ

じゃあ、正思惟とは何ぞやと。正しく思惟する、正しく思索するとは何ぞやといったら、これは、ね、すべてのものというものは、無明から始まり、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老、死、愁、悲、苦、憂、悩という苦悩と、ね。そして、苦悩、信、ね、修行、クンダリニーの覚醒、ね、そして、悦、喜、軽安、楽、三昧、如実知見、ね、遠離、離貪、解脱なんですよと。でね、正思惟というのはそのように思索すると、ね。そのように思索する、これが正思惟なんだよ。

じゃあ、何だと。無明とは何ぞやと。無明というのは、わたしたちのこの身・口・意のけがれによって、わたしたちは純粋なわたしたち自身を見ることができなくなっていると。それによって、身・口・意の正しくない行ないが生じると。これはちょうど、ね、けがれた鏡がここにあって、光を正しく反射することができないのと同じであると。あるいはここにレンズがあって、そのレンズが正しく光を通すことができないのと同じであると、ね。これが無明です。そして、行で

す、ね。

そして、その正しくない身・口・意の行為によって、わたしたちは六つの識、ね、これは、眼の識、眼識、耳識、ね、それから鼻識、舌識、身識、意識という六つの正しくないデータを放り込まれると、ね。難しいでしょう、結構。小乗の経、『阿含経』といっても、その本質の縁起の法というのはなかなかわかりづらいと。ところが、ね、無智に覆われている現代人は、小乗より大乗が偉いんだといっていると。もちろんそのとおりだ。しかし、その大乗はあくまでも、いつも言っているとおり、どうだ、小乗の上に立脚するものでなければならないと。わかるね、言っていることは。ね。

◉正しくないデータ——曇った鏡

そうすると、その正しくないデータによって、わたしたちは名色を形成すると。で、この名色の名というのは、五蘊の中の受・想・行・識を表わしていると。そして、色というのは四大エレメント、地・水・火・風を表わしていると、ね。こ

れに影響が生じてくるわけだね。その正しくない六識によってだよ。ね。

そして、六処がそれによって感応し出すと、ね。つまり、こちらの受け手側が、それによって正しくない反応をし出すわけだ。

例えばだよ、ここに、ね、彼がいると。そうすると、彼は人間であって、例えば手足を持っていて、顔があって、顔には目と鼻がついていると。しかし、ある人は美しいと見るだろう。ある人は醜いと見るだろう。ある人は美しくも醜くもないと見るだろう。なぜかといったら、先程言った、もう既に六識の中で正しくない情報が入っていて、それが名色に影響を与え、いいかな、その名色の影響によって六処が動き出すと、ね。

そうすると、わたしたちは外界と接触することによって、これは触だ、ね——その外界との接触の対象物は何かというと、要するにこの現象界、目に対する視覚の対象物と、耳に対する聴覚の対象物と、鼻に対する嗅覚の対象物と、味覚に対する、ね、舌に対する対象物と、それから感触に対する対象物と、それから、わたしたちの意に対するね、つまり心に対する対象物、法だね、観念と、これと

ぶつかり合うと、ね。

そうすると、もともとはだよ、君たちが成就をすれば、百人中百人、あるいは千人中千人、同じような目で見ることができるはずだ。それはちょうど、このように表現できると。ここに、ね、鏡があって、百枚の鏡があってだよ、その百枚がピカピカに磨かれたとしようじゃないか。いっさいの曇りのない状態と。どうだ、ここに物があって、それを同じように映し出すと思うか、違うように映すと思うか。どうだ。同じように映し出すよね。それと同じ状態になるんだよ。その鏡の大きさ小ささは関係ないよね。どうかな。

ところが、ね、けがれている部分が違うと、あるいは色合いが違うとどうなる。その百枚ともすべてが違うように映し出すよね。わかるかな。そして、ここのところがポイントなんだね。これが先程言った六処の働きと。もう既に、だから見る側に問題があるわけだよ。そうすると、当然接触によって生じた、見られる側との関係というものは、ズレが出ていると。これはOKかな。

それによって愛着が生じると、ね。それは、ね、この色に対する、つまりわた

したちの視覚的な対象物に対する愛着であったり、あるいは音に対する愛着であったり、ね、あるいはにおいに対する愛着であったり、ね、あるいは味覚に対する愛着であったり、あるいは触覚に対する愛着であったり、あるいは観念に対する愛着であったりすると。それが生じるんだと。いいね。

◉四つのとらわれ——有の世界の形成

そして、愛着が生じることによって、次はとらわれるわけだ、ね。例えば、いいかな、この煩悩（ぼんのう）は、ね、この欲望はわたしたちを幸福にしてくれると、ね。いいか。例えば、ね、ここに一個のミカンがあると。このミカンを見て、このミカンはわたしを喜ばせてくれる、このミカンはおいしいと。どうだ。ところが、ある人はこのミカンに対して酸っぱいと。酸っぱいのが嫌いな人は、当然、このミカンはわたしを苦しめると考えると。わかるかな、言っていることは。これが、欲の限界であると、ね。

そして次、例えばここにミカンがあってだよ、ミカンを食べると、例えば体を

害するという見解を持っていたとしようと、ね。そうすると、そのミカンを見たときに、これはわたしの食べてはいけないものであるという見解が出てくると。どうだ。そうすると、それを戒のとらわれ、ね、あるいは禁戒のとらわれといっていると。いいかな。

そして、例えばこの法は素晴らしいと、ね、あるいはこの法は素晴らしくないというとらわれと、ね。これは、どうだ、法のとらわれということになると。

そしてもう一つ、例えば、わたしは正しくて彼は正しくないんだと、ね。例えば、わたしの言っていることは正しくて、彼の言ってることは正しくないんだとか、ね、わたしの行為は正しくて、彼は正しくないんだというとらわれが生じてくる。これは、我見ね、我に対するとらわれといったようなものが生じてくると。

あるいは、ね、単に美しい、美しくないといったようなものに心が縛られる場合もあると、ね。いいかな。そして、このようにとらわれるがゆえに、ね、当然三グナは心の働きによって世界を形成しているわけだから、そのような世界があちこちで形成されていると。これが有の状態であると、ね。有というのは何かと

いうと、ね、実存していないものが実存していると。

◉すべては滅する——老死の苦悩

そして、その有というものは、当然生じて、維持されて、どうなる、滅せられると。わかるよね。そしてその中に、わたしたちはわたしたちのカルマによって生を受けるわけだ。生まれるわけだ。どうだこれは。大変素晴らしいね。ところが、これは有の世界だから、当然、生じ、維持され、滅せられるわけだね。そうするとどうなる。わたしたちは、そこで経験するのは老死であると。わかるね。滅せられる前というのは、必ず破壊されるよね。どうだ。

で、一つここで考えなければならないことは、いいかな、例えば飛行機だって金属疲労で落ちてしまう。よく聞くよね、金属疲労がどうこうって、ね。一見金属というのは、変化しないように見えると。しかし、必ず変化するんだと。あるいはステンレスというのは、久遠に錆びないと、永遠に錆びないといわれていると。しかし錆びると、例えば。つまり、この世で無常でないものというのはな

いんだね。半永久的なものというのは、インチキだと思わないか。半永久というのは、絶対的な永久ではないわけだから。どうだこれは。そして、この世には半永久という、つまり寿命の長いものは存在するけども、絶対的な滅のないものは存在しないんだと。いいね。

よって、老死という苦悩を味わうと、あるいは病という苦悩を味わうと、あるいは生活をしているときに、心に憂いだとか、悲しみだとかね、焦燥感だとか、いろんな心の苦悩を味わうということなんだ。

◉身・口・意の浄化——透明なる世界へ

じゃあ、それを滅するためにはどうしたらいいんだと。生を滅すればいいんだと、ね。つまり、この世に生まれてこなければいいんだと。生を滅するためにはどうしたらいいんだ。有を滅すればいいんだと、ね。有を滅するためにはどうしたらいいんだ。とらわれを滅すればいいんだと。とらわれを滅するためにはどうしたらいいんだ。愛着を滅すればいいんだと。愛着を滅するためにはどうしたら

いいんだ。六処を滅すればいいんだと。

そこで、ヨーガの修行者たちは、例えば、ね、五感を滅するプラーナーヤーマとかやるわけだね。目を閉じ、耳を閉じ、鼻を閉じて修行を続けるとかね、例えば。これは何かというと、視覚のとらわれ、嗅覚のとらわれ、あるいは、ね、聴覚のとらわれといったものを滅するための一つの修行なんだね、例えば。いいかな。

そして、ね、六処を滅するためにはどうしたらいいんだと、ね。名色を滅すると。名色を滅するためにはと、ね。識を滅すると。識を滅するためには行を滅すると。そして、その行を滅するという、ね、この行を滅するというのは、止めるのではなくて、行を最も清らかな状態に、最もクリアな状態にしてと。で、そこで生じてくるのが八正道なんだよ。あるいは十戒なんだよ、ね。

例えば、殺生をしない、偸盗（ちゅうとう）をしない、邪淫（じゃいん）をしない。これは身の行ないの浄化と。でしょ、ね。あるいは、嘘をつかない、意味のない言葉を話さない、あるいは仲たがいさせる言葉を話さない、悪口を話さないと。これは口の浄化でしょ

う。心の中に貪りの心を生じさせない、ね、嫌悪の心を生じさせない、あるいは真理を否定する心を生じさせない。これは、心の浄化でしょう。わかるかな、言ってることは。ね。

そして、それを日々行なうと。その日々行なうための体系が八正道なんだよ。そして、行が滅すれば無明が滅せられる。無明を滅すれば、完全に滅すればね、透明な状態になる。そして透明な状態になったとき、わたしたちは絶対的な幸福・自由・歓喜を得るんだと。なぜならば、すべてのものをありのままに見るからと。これが縁起の法です。

◉小乗の完成——貪・瞋・癡の止滅

じゃあ、その方法論はわかったと。、じゃあどうしたらいいんだというとこに出てくるのが、ね、その苦から信が生じて、修行して、クンダリニーを覚醒させて、ね、そして悦に入って、喜、軽安、楽、三昧と入っていくわけだ。なぜ三昧に入ればいいのかといったら、三昧というのは、この、まず少なくともこの肉体

的な働きと、それから口の働きを停止した状態であるからと。そして、すべてを知り、ね、これは如実知見だね、遠離、離貪すると、ね。遠離、離貪することによって、心の三つの浄化が起こる。これは何かというと、貪り、無智、ね、それから嫌悪といった三つの感情が完全に止滅すると。そして、三つの感情が完全に止滅した段階で、わたしたちは解脱したんだというわけだ。これが真の意味です。簡単だね。

はい、今日はね、君たちがまず小乗の完成をするために、絶対的に必要な縁起の法について説いた、ね。そして、この教えを君たちが実践するしないはそれは君たちの自由だけども、しかし実践すればそれだけ価値のあることだと。いいですか。

一九八九年四月三日　富士山総本部において

◆第二話　苦しみの転生とを抜け出すために

「そして死を超越せよ！」

◉第四解脱――喜楽禅

今日は第一回目にも行なったが、なぜわたしたちはこの世に生まれ、転生とはどういうものか、そして、そこから抜け出すためにはどうしたらいいか、それについて話したいと思う。

いわく、『阿含経』には、わたしたちがこの世に生まれる根本的因は無明であるといっている。

この無明とは何か。この中で何人か経験があると思うが、サマディの第四段階、歓喜に満ちあふれた解脱がある。これを、わたしは喜楽禅と呼んでいるね。喜と

楽が一緒にきた瞑想だ。「シャンバラ新聞」（オウム真理教の初期の機関誌）では第四天禅、あるいは第四解脱という書き方をしてある。第四解脱の状態というものは、有我想三昧とも呼ばれ、いいですか、有我想三昧、有るに我がある三昧とも呼ばれ、「わたしはシヴァである」、あるいは「わたしは仏陀である」、こういうことがね、心からわき起こってくるんだ。いいですか。

そして、初めのうちはグリーンのエネルギーが帯状に見えている、目の前をね。それが徐々に徐々に上方に向かう。そして下方に向かっていく。そのときのグリーンというものは、本当のグリーンだ。つまり青も入ってない。黄色も入ってない。純粋なグリーンだ。そうすると、サハスラーラ・チャクラからね、俗にいわれてるネクターだね、不死の甘露が落ち出す。ポトッ、ポトッとね。そして、それが終了すると、次はその内側がね、真っ黒な、いいですか、本当に汚い色で包まれていることがわかる。そして、その内側が青緑だ。この三重の層がある。これが第四天禅、あるいは第四解脱、喜楽禅といわれているものだね。

◉無明、イコール無智

それで、なぜここでいきなり第四解脱から入ったか。それはね、その、真っ暗闇、真っ黒い壁、いいですか、それが無明なんだ。よく言ったものだとわたしは思っている。なぜか。その無明の中に入っているときは真っ暗だから。だから無明なんだよ。あなた方が読んでいる本の中で、こういうことが書いてあるだろう。無明、イコール無智。無智とは仏教の本質を知らないこと、あるいは魂の本質を知らないことと書かれている。しかし、実際はそうじゃない。無明は無明だ。見えないから無明なんだよ。いいか。そして、この無明の中に入っているとき、わたしたちは無智だ。何もわからない。それはなぜか。

ここにあなたがいて、ピラミッド好きか、あなた。

(信徒)ええ。あの、嫌いじゃありません。

あなたをピラミッドの中に入れたとしよう。わたしは興味ないけどね。そうするとね、彼は外側は見えない。見えないだろ。

(信徒)ええ。

だから無智なんだ。外側の世界が見えない、内側の世界も暗いから見えない。だから無智なんだ。わかるか。それが有我想三昧の状態、歓喜禅の状態だ。いいか。

で、大切なことはここだ。それを、まず釈迦牟尼如来は根本とすると言っていらっしゃる。それはなぜか。その内側にあるのは真我しかないからだ。正確にいうとね、真我と連動しているエレメントがあります。それは、神素と訳しているけどもね、普通は。それしかないからだ。つまり、もし彼が、わたしはピラミッドが嫌いだと、ピラミッドを自分でぶっ壊したとしよう。そこには真我しかない。そして、そこは光である。慣れない人間には、初めにね、黄金色に見えてくる。いいか。これは、わたししか知らないことだよ。ちゃんとメモしておいて。次に白銀色、そしてミックスされて黄色が見えてくる。いいですか。

その真我だけの状態になったとき、あなたは本当の幸福に至ることができる。そしてそのときね、すべては四つの流れによって動いてることを知る。それは、どんな綺麗な服も、いいですか、綺麗な服というのは先程のピラミッドだ。どんな綺麗な服も、輝いてる服も、いっさいは苦だ。つまり、この世の中すべてがいっ

さいが苦である。苦というのは何か。安定していない、そして不安の材料だということだ。

そしてね、次に気づくのは、それは、わたしもあなたもあなたもみんな生起する、起き上がる、いいですか。そして、その起き上がった苦というものは、ま、起き上がったものは必ず倒れる。それと同じように倒すことができる。つまり、滅尽することができるんだね。滅することができる。そして、それは正しい八支の道を歩けば、滅尽が可能だということに気づく。

◉いっさいは苦である

ではね、その八支（はっし）の道とは何か。よくみんな知っている言葉だ。八正道、知ってるか。

（弟子A）ええ、一応読んだことありますけど覚えてません。

（尊師）覚えてないか。知ってる人、だれか言ってごらん。八正道とは？　はい、言いなさい。

（弟子Ｂ）よくわかりません。

（尊師）いいからいいから、気にしないでいいから。あとは、わたしが付け足す。はい。

（弟子Ｂ）正見、正語、正業、正精進、正命、正念、正定で、あと一つ…。

（尊師）正思惟ね。正しい思索。それで八つ。これを実践することによって、苦というものを滅することができる。つまり、わたしたちの覆いを取り払うことができると言っているわけだ、釈迦牟尼は。

その一つ一つを詳しく説明してあげよう。

まず正見。正しく見るということだね。これは、いっさいが苦である。そして、それは触によって生じる。触とは何か。接触のことだ。もしあなた方が接触しなければ、いっさいの苦は生じない。だから、だれかが困ってる、苦しんでるのを見る、そのとき、あなた方はね、それは触によって生じると理解できるかどうか。これは第一、第二のポイントだ。

それはどういうことか。この森羅万象、いっさいが苦である。そして、その苦

とは触によって生じる、ね。いっさいは苦であるという見方が正見だ。そしてそれは、触によって生じる。触とは何ぞや。いわく、わたしたちは十門を持っている。十門って知ってるか。あなた方は九門しかない、わたしは十門持っている。十の門だ。O、言ってみろ。十の門だ、入り口だ、出口だ。わからないか。

（O）わかりません。

まず、目が二つ、耳、これで四つだね。それから鼻、六つ、ね、口、七つ、そして性器と肛門だ。これが九、そして、あなた方が完成すると、サハスラーラ、マハー・ムドラーの門、十門を生じる。わたしたちは、この十門によってエネルギーを吸収したり排泄したりしている。いいですか。

それと意識は連動し、六処をつくる。六処とは、今の十門を言い換えたものだね、目、耳、鼻、口、そして身体、そして意識だね。これを六つ、六処。この六処によって外界と接しているわけだ。どんな事象についても、この六処を抜きにして考えることはできない。いいですか。よく聴きなさい。つまりあなた方が、もしこの六処をだ、外界からいっさいシャットアウトしたら、あなた方は解脱す

るだろう、それだけで。だから、バグワンは何もやるなと言っている。ところが現実的には不可能だ、それは。いいですか。まあいい、それは。

それが正思惟、正しい思索だね。いっさいは苦である、そしてその苦というのは六処を媒体として起きる。これが正しい思索だ。他のことを正思惟とはいわない。そこから出てくる言葉がある。

あるね、アホな僧侶がこういうことを書いていた。正語というのは丁寧な言葉だ。ばかばかしい、違う違う違う、そうではない。あるいは、ある宗教団体の霊能者、これは四十八歳で亡くなっているけどね。こういうことを言っている。正語というのは神の言葉だ。違う違う、いっさいが違う。

◉八正道——無明を滅するために

では、正語とは何だ。それは法にかなった言葉だ。法とは何だ。いわく、十二縁起にのっとって、いいですか、十二縁起、それを語ることだ、これが正語だ。あるいは、施戒天を語ることだ、これが正語だ。

いわく、十二縁起とはね、まず無明あり。無明なるがゆえに行が生じる。行生じるがゆえに識が生じる。後で質問しなさいよ、メモとっといて。識生じるがゆえに名色が生じる。名色生じるがゆえに六処が生じる。六処生じるがゆえに触が生じる。触生じるがゆえに受が生じる。これは感覚だね。あるいはイマジネーションだ。感覚、イマジネーションが生じるがゆえに愛着が生じる。そして取著（しゅじゃく）、とらわれる。いいですか。とらわれるがゆえに、三界、欲界・色界・無色界に生まれ変わる。それによって、わたしたちはボディーを持つ。これが生だ。生まれたがゆえにわたしたちは苦を持つね。それを、苦を、『阿含経』では心の問題、そして老化と病気、死、これをいっている。これが十二だ。まず第一に、これが語れるかだ。

あるいはもう一つ、この世に執着している凡夫は——いいですか、これは在家のことをいう——そんなに修行ね、修行ばっかし、一日十七時間も二十時間もできない。だから最低二時間ぐらい瞑想しろ、まず。それが第一だ。そして、五戒を守りなさい。五戒とは、殺生、偸盗、ね、言い換えよう、人、生き物を痛めつ

けるなかれ、盗むなかれ、そして愛のないセックスをするなかれ、嘘をつくなかれ、知らない世界のことを言うなかれ、この五つだ。それと、深酒をしてはいけない。できたら飲まない方がいい。そして、仏陀と仏陀の弟子たちと仏陀が説きたもうた法に従いなさいと。それをやることにおいて、あなたは天界へ行けるだろうと。この二つ、この二つを正確に語ること、これが正語だ。他のことを言わない、いっさい他のことを言わない。いいですか。

そして、修行者たるものは、カルマによって修行者となった。ところがそれは、悪いカルマもまだ残っている。だから、そのカルマに対して正しい見解を持つ。例えばだ、ここに僧侶がいた。修行者がいた。子供がばかにして棒で殴った。そのときにね、「このやろう」というのは正しいカルマに従っているのではない。わたしがここで棒で叩かれたのは、意味もないのに過去世において小さな子供を棒でぶん殴ったカルマだろうと、そう考えなさい。そして、それを実践する。そのことによって、あなた方は正業というものがね、何であるかわかるだろう。それが、正業の実践だ。

そして、正命がくる。正命とは何ぞや。これは、日々の生活の中で、釈迦牟尼が説きたもうた正しい行為がある。いいですか。例えば女性の比丘尼はね、水浴をするときも全部を出してはいけないとか、決まりがあるわけだ。あるいは、一日に二度食事をしてはいけないとか。それを実践すること、それが正命だ。

そして、正精進がある。これは何か。これはね、わたしは今全力で修行しているだろうか、絶えずそれを考え、一分でも一秒でも空いた時間、修行すること。それが正精進だ。

そして、正しく思念する。"Who am I.?"だね。わたしとはだれだ。真我とは何だ。解脱とは何だ。ニルヴァーナとは何だ。これが正念だ。

そのすべてが終わると、正しい瞑想に入る。そしてすべてを知ることができる。それが正定だ。いいですか。よく聴きなさい。

いいですか。この八正道を行じることによって、あなた方はこの世というものが苦の世界であることに気づく。そして、この世はいっさい無意味だということに気づく。いいですか。それによって無明を根本的に滅することができるわけだ。

ところがだよ、今のプロセスというものは漠然としている。今のプロセスというものはね、やり方なんだ、やり方。やり方その一、ものを正しく見ましょう。その二、ものをよく考えましょう。こういうことになるわけだね。

◉上昇のプロセス——解脱へ

じゃあだ、解脱へのプロセスはどうかということになる。わたしは先程、いっさいが苦であるという話をした。それは、生まれるから苦が生じるという話をした。いいですか。ところがね、もうわたしたちはここに生まれている。苦の中にいる。だから、これはどうしようもない。じゃあ、あきらめるかということになる。

ところがだ、苦あるがゆえにわたしたちは信じることができる。それはだよ、例えばあなたたちが病気をしたとしよう。例えばガンだ。ガンのときは、ガンが治りたいがために必死に医者を信じる。あるいは、医者で治らなければ霊能者、超能力者を信じる。いいですか。つまり、あなた方が本質的にこの世はすべて苦

だと気づいたとき、あなた方は、逆にそれを抜け出すために強い信を持つことができる。そして強い信を持って修行する。

修行すると、クンダリニーが覚醒するんだ、ね。これはどんな修行をやってもクンダリニーは覚醒します、まともにやっていれば。真剣にやっていれば。ではクンダリニーが覚醒した。これを何といっているか、釈迦牟尼は。悦といっている。喜びだ、それは。悦によって何が生じる。喜が生じる。本当の意味で喜びが生じる。悦というのはね、背中をスーッとクンダリニーが上がる、サハスラーラに到着する、いいですか、このとき背骨に快感が走るんだ。これを悦という。

そして喜とは何か、これはね、頭頂から甘露水が落ちてくる、先程言った。ネクターだね、ネクターが落ちてくる。ビンドゥーでもいいだろう。そして、それがアージュニァーを通過して、アージュニァーは何も感じない。ヴィシュッダ、アナハタ、マニプーラ、それからスヴァディスターナね、これを通過する。このときに大変な喜びが生じる。これが喜だ。

この修行を繰り返していることによって、軽安が生じてくる。軽安というのは

何か。身体が非常に軽やかな状態だ。座っていて、あまり体を感じない状態だ。いいですか。

軽安生じるがゆえに、楽が生じるわけだ。座っていること、定に入っていることが大変気持ち良くなる。それはマインドの状態だね、心だね。あるいは魂だ。よくメモしなさいよ。楽が生じたらね、長く座れるから、精神集中もできているから、三昧に入れるんだ。だからそれを、精神集中、精神拡大、それから三昧ね——主体と客体が同一化した状態——これを一緒に三昧とここではいっている、釈迦牟尼は。いいですか。

そうするとね、三昧に入ると、すべての事象がわかるわけだ。例えばここに、今愛している人がいる。その彼女は、ね、過去においてだれかと付き合ってヴァージンじゃない。いいですか。そこであなたが引っかかったとしよう、例えばだよ。そうすると、三昧に入って彼女を見ると、彼女が今まで、いかにたくさんの結婚をしたかわかる。その段階で、そのこだわりはなくなるだろう。ま、三昧に入ったら結婚しないだろうけどね。ちょっとこれは矛盾だけどもね。つまり、それを

如実知見といっている。すべての世界のことを正確に把握する力だと。

すべての世界を正確に把握した段階で、離れることができる。これは苦であって楽ではない、いいですか、これはわたしを本質的には喜ばせるものではない、それに気づく。気づくと貪りから離れる。わたしは、あした食べる米のお金さえあればいいんじゃないか。別に、一千万も、一億もためる必要はない。そういうことを思い出すようになる。

そうするとね、その状態が解脱なんだよ。いっさいの覚がね——覚というのは、この六つの場所が外側と関係しなくなった——例えば、ある人が、お金を持っていれば幸せよと、車も買えてと、ね、それを聞いても何にも感じない。彼女はどうだったこうだった、それを聞いても何にも感じない。つまり情報、インフォメーションというものがね、全く役立たない状態がくる。これが解脱だ。いいですか。

解脱すると、こう思う。わたしは、今まで迷妄の世界に入っていた。だから、わたしは迷妄の世界から出ようと努力した。そして出た。もうわたしには、欲界もない、色界もない、無色界もない、わたしにはニルヴァーナしかない、わたし

の生命は永遠である、わたしは生もなければ死もない、ということになる。これが全プロセスだ。わかりましたか。

◉六道からの脱却——二つのポイント

じゃあだ、転生はどこで行なうか。凡夫の転生は。それは、最も執着しているものが最終ヴィジョンとなって現われる。例えば、あなたが亡くなる、ね。そうするとだ、まず、透明光が射し込んでくる。法界のエネルギーだ、これは。それに飛び込めば、法界に入れる。ニルヴァーナの一つだ、これは。次は、白透明の色が射し込んでくる。白銀じゃないよ。これは報界だ。これは供養を受けるに値する世界だ。そして、赤紫の色が入ってくる。これが、応身、つまり変化身の世界だ。

しかし、普通の人は、あまりにも透明で何が何だかわからない。通り過ぎる。そうするとね、次は、大日如来を中心とする救済者たちが現われるんだよ。まあ、前半は優しい神様が現われる。それで済度できなければ、後半は恐ろしい形相を

した神様が現われる。いいですか。

それでもし済度できなければだ、次はあなた方がよく知ってる六道輪廻(ろくどうりんね)だ。地獄、餓鬼、動物、ね、念仏みたいだね、人間、それから阿修羅、神、これに生まれ変わることになろう。そして、ポイントとなるのは、この六道のことがポイントとなる。なぜかというと、ほとんどの人、この中の八割の人は、そのバルドーに落ちるだろう、おそらく。だから、わたしはここでアドバイスをしておくよ、わたしの経験から。皆さんはよく覚えときなさい。

まず、あなた方がこの世でね、愛着していた人が現われる。いいですか。その愛着していた人のヴィジョンというのはね、必ずあなた方にとっては人間の形で見える。実際はそうではないよ。そして、それが非常に艶(なま)めかしく見える。そしてその周りには、あなた方の大好きなごちそうが待っている。そして、あなた方が飛び込んだ際の一生のヴィジョンが見えてくる。しかし、それはでたらめだ、実際は。ただ、それに愛着しているとその人の世界には行ける。例えば、その人が動物界にいたら、あなた方は動物となって生まれ変わるだろう。人間界だった

ら、いいですか、人間界となって生まれ変わるだろう。神だったら、神となって生まれ変わるだろう。

そこでだ、じゃあそれから逃げる道はあるか。一つだけある。それはね、まず宗教的なヴィジョンを選びなさい。これは覚えておきなさいよ。宗教的なヴィジョンを選びなさい、まず。なぜか。猫には宗教はない。犬にも宗教はない。いっさいの動物に宗教はない。餓鬼にもない。地獄にもない。宗教的なヴィジョンがあるのはね、人間界以上だ。いいですか。そして次にね、国土の貧しさ豊かさよりも、人々の安らいだ顔、それを選びなさい。この二つがポイントだ。

あなた方がこのヴィジョンに飛び込むと、たとえだよ、初めにあなた方の好きな人のヴィジョンが出てきても打ち消して、その二つをポイントとして選ぶと、必ずあなた方は人間界以上に生まれ変わる。いいですか。そして、まあ、ある程度、動物から比べるとね、幸せな生活を送ることができるだろう。これがあなた方のバルドーのからくりだ。

一九八六年八月～九月　丹沢・集中セミナーにて

◆第三話　エゴを落とせ

「十二縁起の実践的利用法」

◉ヨーニ・ムドラー――外界をシャットアウトする方法

実践的に十二縁起の法をどう利用していくか。今日はそれを課題とする。

わたしたちは、六処によって外界と接触している。六処というのは何か。まず目、耳、鼻、口、そして身体だ。そして最後は、意識だね。

この六処の中で、五つは簡単にブロックすることができる。それは、まず社会から離れ、一人で座り、そしてね、ヨーニ・ムドラーをやることだ。

ヨーニ・ムドラーのやり方はいろいろある。例えばまず、小指で耳を押さえる。そして人差指で目を押さえる。それから中指で鼻を押さえる。そして、両方のね、

薬指と小指で口をはさむっていうやり方。これが、まあ、一般的なやり方だ。いいですか。確かにこれによって、目、鼻、それから口、耳、の四カ所はシャットアウトできる。そして、社会から離れると、その上に身体のね、感覚を遮断することができる。

皆さんは、この六処が一番魔物であることを知っているか。例えばね、現代のアホな宗教家がこう言う。あの人は目が見えないと。目が見えないのはひどいカルマだったからだと。例えば、あの人は耳が聞こえないと。耳が聞こえないのは前生において、ね、人の耳をつぶしたからだ。こういう言い方をする。まあ、そういう例もたまにはあるだろう。

ところがだ、わたしのセミナーの中で、視力の弱い人、あるいは耳の聞こえない人、こういう方々が数人いる。ところが、いずれも彼らは瞑想の達人だ。いいですか。それは彼らが、前生においてアラハットね——まあ、阿羅漢（あらはん）といわれている、最高状態だ——に行けないで、その途中で止まったからだ。

そうすると、例えば目の行が停止する。いいか。目の行が停止すると、次の生

では目が見えない。耳の行が停止する。そうすると、次の生で耳が聞こえない。臭覚ね、鼻の行が停止する。そうすると、その次の生ではにおわない。同じだ、味がない、あるいは感覚が鈍いということになる。

これは、素晴らしいカルマだ。この世は一つの幻にすぎない。だから、まず、その幻から離れなければならない。いいですか。そのための一つの方法がヨーニ・ムドラーだ。

では、わたしはどうするか。どういうやり方を採っているか、ちょっと説明しようね。要点は、耳と鼻と口なんだよ。目はつぶっていれば、つぶられる、これは。意志でできる、これは。だから、目は押さえない。そして、まず親指を耳の中に入れる。実践してみて。耳の中に入れる。いいか。そして目は押さえないよ。額を押さえる。いいか。鼻を押さえる。そして口は、こうはさむんじゃなくて、押し込む、後ろにね。それがわたしのヨーニ・ムドラーだ。そして目をしっかりつぶりなさい。

これは、どういうときに行なったらいいか。それはあなた方の心がテレビを見

たい、ね、いい音楽を聞きたい、ね、いい香りのとこにいたい、ね、おいしいものを食べたい、そのときだ。

◉落下のプロセスをさかのぼれ！

では、触覚についてはどうか。あるいは意識についてはどうか。これはバンダをやりなさい、バンダ。例えばあなた方がやってるアパンクリヤだ。これによって確実に無感覚の状態が出てくるだろう。いいですか。それが仏陀の説いた十二縁起の法の中のね、六処、触、それから受、ここを破壊することだ。

君たちは、わたしたちの肉体がエネルギーでできている、それはわかるだろう。そして、そのエネルギーは一方方向にしか行かない。外側に向かうか、内側に向かうか、どちらかしかない。行き道は二つしかないわけだ。いいですか。

六処で遮断されたエゴというものは、ね、名色に入っていく。名とは何か。これは四大、地——地のエレメントとは肉のことだね。水のエレメント、これは血液のことだ。で、火のエレメントは体温のことだ。風のエレメント、これは呼吸

だ。これと、ね、感覚、そして表層、心に思い浮かぶことだね。そして判断、識別、これに分類される。このプロセスで入っていく。修行を始めた人たちがよく色を見るのはこれだ。

例えば、グリーンのエレメントはエナジー、ね。それから、ブルーのエレメントはスペースね、空間。そして、イエローのエレメントはアースね、地。それから、水のエレメント、これは白ね。そして、ファイアー・エレメントは、赤だ。まずそれが見え出す、この修行をやっていると。つまり自分たちの肉体が、この五つで構成されていることがわかる。いいですか。

それでだ、もう少し修行が進んでいくと、どうなるだろうか、ね。それは、六識に到達する。この六識のときに、天眼、天耳、他心、漏尽、宿命、ね、この五つの神通力がつく。それはなぜか。根元的な部分だからだ。わたしというものの居所だからだ。いいか。その六識とは何か。目に関するヴィジョンの源ね。それから、耳に関する音の源。そして鼻に関するにおいの源だ。そして味に関する味覚の源だ。そして触覚に関する源だ。最後に、先程言った表層、それから識別、

判断、ね、こういう心理作用に関する源だ。いいですか。

この状態に到達したときに、逆に自分が何だかわからなくなる。なぜ自分が何だかわからないか。それは、わたしたちは、例えばここにあなたがいるから、わたしはここにいる。そうだろ。もし、あなたがいなかったら、わたしはここにいるというのは感じられない。その状態に到達する。外側と完全に遮断された状態だ。いいですか。

そこから、プロセスとしては行に入る。行というのは、これはもっと凝縮されている。心の中でしゃべるようになる。いいですか。そして、肉体から魂が抜け出して動くようなる。これは経験した人間がいる、わたしの弟子の中でも。そして、あと意識だ。この三つのプロセスに入る。これがいったい何を求めているか、よくわかってくるはずだ、そのときに。これが行のプロセスだ、ね。

◉無明を滅せよ！

そして、それからくるのは真っ暗闇だ。ここで一つ言っておきたい。アホな人

間がね、例えば日蓮は真っ暗闇にいるから、あれは無間地獄にいるという。あれは全くのどアホだ。彼は根本無明の中にいる。いいですか。別に彼は無間地獄に落ちたわけではない。

つまり、最後のプロセスは真っ暗闇なんだ。全体が真っ暗闇だ。で、自分がどこにいるかわからない。これを根本無明というんだよ。無明だから無智なんだよ。そうだろ。

例えばね、ちょっといいかな、真っ暗闇で、光の全くない状態で、あなたは本を読むことができるか。できないだろう。それと同じことなんだ。この真っ暗闇の中では、知識というものは得られないんだ。わかるか。もし、そこで知識というものを得ていたら、真我は動かない。なぜ動かないか。これは、自分を苦しめるためのプロセスだということがわかってるから、ね。ところが真っ暗闇だから動かざるを得ない。

じゃ、この真っ暗闇とは、なぜ、その真っ暗闇の中に自分はいるんだということになる。いいか。A君、なぜ真っ暗闇の中に自分がいると思うか。

（A）外界を遮断したから。
（尊師）違う。じゃあS君、なぜだと思うか。
（S）んー、……。
（尊師）じゃあ、O君どうだ。
（O）……。
（尊師）この真っ暗闇というのはエゴだ。つまり、自分たちがなしてきた、過去世から今までの経験がね、壁となって生じているわけだ。だから、じーっとしていれば、そのエゴは落ちる。あるいは、いいですか、真っ暗闇の落とし方を知っていれば、それが落ちるわけだ。落とす方法、これがジュニアーナ・ヨーガだ。一つずつはいでいく、これがジュニアーナ・ヨーガだ。いいか。
　もう一つの方法が只管打坐（しかんたざ）だ、これは。ただ、ね、重力の法則じゃないけども、そのエゴが落ちていく、時間が経って落ちていく。カルマっていうのは時間によって出てくるからな。これが、単に座る禅だ。もう一つは、その真っ暗闇の状態で、魂をエネルギーによってぶち抜く。そして上昇させて、その世界から抜け出す。

これがクンダリニー・ヨーガだ、プロセスとしては。いいですか。他の方法では解脱はしない、言い方を換えれば。必ずこの三つのどれかのプロセスをたどる。いいか。つまり、真っ暗闇じゃないんだよ、最後は。目をつぶっていても光輝くようになる。A君は経験しただろう、少しは。

（A）ええ、経験しました。

（尊師）どうして、それなのに目をつぶっているかなんだ、遮断しているかなんだ。

（A）ちょっと、前の無明という言葉にこだわってたみたいです。

（尊師）そうだろ。つまり君たちが解脱することは簡単なわけだ。どうしたらいいか。自分をつくり上げている壁を破ってしまえばいい。ね。それはどんなやり方でも構わないわけだ。これがわたしのシステムだ。オウムのシステムだ。

だからオウムにはクンダリニー・ヨーガがある。そして、ね、ジュニアーナ・ヨーガがある。そしてただ座らせる場合がある。いいですか。だから皆さんは確実に解脱することができる、本気になれば。

◉色を塗る以上に色を落とせ！

ところがだ、現代人はこうだ。

「わたしは瞑想が好きなんですよ。」

「ほー、それは素晴らしい。何分やりますか。」

「ええ、毎日三十分やってます。」

ね。確かに現代生活において三十分というのは大変な時間だ。しかしよく考えなさい。わたしたちは毎日毎日、壁にね、色を塗っているわけだ。二十三時間三十分の間ね、色を塗り続けているわけだ。そうだろ。経験という色を塗っているだろう。わかるか。その経験という色を落とす時間と、塗る時間とどっちが長いか。だからね、最低六時間、ミニマム六時間とパイロット・ババが言った。わたしもだいたい最低六時間欲しいと思う、解脱の人はね。

それはなぜか。まず睡眠、これを八時間減らす。ね。それから食事、それから、ただ単に考えないで動いてる時間、ね、これを四時間減らすんだよ。そうすると、十二時間残る。そうすると塗った分だけは消すことができる、ね。で、瞑想に熟

達してくると、塗るよりも消す方が速くなる。だから解脱できるというわけだ、理論的には。わかるか。

じゃあ例えば、一日三十分じゃ何の効果もないか。そういうことはないよ。普通の人は、おそらくね、今日本に一億一千万ぐらいの人口がある、ね。この中でだ、人間界以上に行ける人は一万人ぐらいだな。そんな比率だ。つまりあなた方は、その一万人の可能性があるわけだ。仏陀が現われたときは別だよ、その十倍、百倍に跳ね上がるから。いいかな。

たとえ三十分、一時間しかなくとも、だから毎日色を塗っているわけだからね、どんどん落としていきなさい、できるだけ。それしかなかろう。そして、あるいは生きているときに、生活しながら自己を絶えず反省しなさい。反省というのはね、これはできなかったらもうしないようにしようじゃないよ。これはどこから出てきたんだろうか、そして、今この結果はどこへ行くんだろうかを考えなさいということだ。ね。いいか。そうすることにおいて、少なくとも壁塗り、それから落とす、この作業がね、壁塗りのスピードが遅れる。ずいぶん遅くなる。

修行というものは急げという、よく。なぜ急げというか。それはいつ死ぬかわからないからだという。しかし、本質的にはそれだけではない。いいか。それは今言ったとおり、わたしたちはこの世で生きている。そしてわたしたちは壁に一生懸命色を塗っているんだ。それはエゴだ。だから、ゆっくり修行すればするほど、壁は汚くなるんだよ。わかるか。

だから、もし解脱を志している人間がいたら、今すぐマインドをチェインジしなさい。わたしは解脱すると。これが解脱へのプロセスだ。本気になって解脱に向かえば難しくはない。しかし、ほとんどの修行者は逃げているね。わたしたちは、逃げでは何も得ることができない。

◉動いている世界の中で

今日皆さんが食事に行って、こういう質問があった。クリシュナムルティがね、すべての行を否定しろと、ね、動くなといっているわけだ。だから、麻原のやり方と少しズレがあると。それはどういうことか説明してくれと。大変いい質問だっ

たね、これは。

ところがよく考えてごらん。クリシュナムルティというのは、神智学教会でマイトレーヤと指名されたわけだ。小さいときから教育を受けている。小さいときからただ座りなさいと、座らされているわけだ。いいですか。だから、彼の解脱のプロセスにおいてはだれの邪魔も入ってない。それどころか、みんなが協力している。逆に彼に話しかけないように、触れないように、そして話すときには宗教的な話しかしない。だから、彼の話を理解できる人間はほとんどいなかった。その彼もそうだ。

しかしよく考えなさい。わたしたちは動いているんだよ。例えば、わたしとあなたは話す。そうだろう。話すときにわたしは情報を得る。あなたも情報を得る。そうだろう。あるいは、外を歩けば、おいしいものがたくさんある。そうだろう。そのおいしいものがたくさんあるというのは何か。わたしたちの瞑想を落としてくれる。そうだな。女性の誘惑はどうだ。これも限りなくある。そうだね。

彼は、そういう環境じゃない状態で解脱してしまった。だから、わたしたち、

ね、凡夫のことはわからない。ところが、わたしたちは動いているんだ。まだ動いている世界の中にいるんだ。だから、それをまず止めなければならない。

つまり、動かないものは、そのままじっとしていれば動かない。そうだね。ところが、動いているものは力によって止めるしかない、これは。それが行だ。つまり、猛スピードで走っている車をどうやって止める。ブレーキをかけるしかない。例えば、山の上方から、ね、丸太が落ちてきたと。放っておいたらどうなる。これを止めるしかない。その止めるときには行が必要だ。いいですか。

◉すべては条件によって

わたしがよく使うたとえの一つにこれがある。もしだよ、あなたが満腹だったら、ね、本当におなかいっぱいだったらだ、あなたの最も好きなものをわたしが出したときに食べますか。食べないでしょ。ところがだ、あなたが最もおなかがすいていたらだよ、あんまりおいしくないものを出したとき食べますか。食べるでしょ。

つまり、条件によって変わってくるわけだ。そのとき聖者は二つの話をする。一つはこういう。あなた方は満腹だったら食べてはいけないと、ね。ところが、おなかがすいている国へ行ったら、こういう。あなた方は満腹になるように経験しなさいと。これは全く矛盾していることだ。たくさん食べなさいという。いいか。

しかし、それは本質的には同じことをいっているんだ。ね。それはわかるだろう、みんな。これはセックスにおいても同じだ。例えば、セックスに対してあんまり興味がなければだ、いいか、あなたは手当たりしだいに女性を抱くか。どうだ。抱かないだろう、当然。ところが、あなたがもうセックスがしたくてしたくてたまらなかったら、どうだ。何でも構わないんじゃないか。

それは、あなたが日本人だからだよ、まだ乾いてないんだ、本当に。で、バグワンはこういっている。ね。とにかく経験し尽くしなさいと、ね。わかるか。それを、彼はアメリカに行っていっている。ね。アメリカ人は飢えているわけだ、日本人に比べてだよ。それはわかるだろう。つまり、アメリカ人おなかをすかせ

ているわけだ。だから食べなさいといっている。でないと、ものすごいストレスになるから。それはわかるね。

ところが、日本人はそれほどおなかがすいていない。そうだろう。だからいいものを食べなさいという、ね。つまり、好きな人を選びなさいという。そして心の訓練をしなさいという。わかるね。

つまり、二者はね、本に書き出したときはこうなる。例えば、麻原は徹底的に行をしろという。クリシュナムルティはいっさいの行をやめなさいという。これは矛盾だ。そうだね。もしわたしとクリシュナムルティが同じ状態だったら、そうだろう、矛盾だろう、これは。文章の上では、ね。それからもう一つ、バグワンは徹底的にセックスをしなさいといっている、ね。わたしは、まあ我慢できなくなったらしなさいという。これも違いだな。文章を見ると矛盾だな、これは。

ところが、あなた方はその本を読んでいるんだ。わかるか。だから、その本においては、何も真実を語ることができない。あなた方は、アメリカ人だったらわかるはずだ、おそらくバグワンの話が。

つまりね、もう一度考えなさい。すべては条件によって生じる。いいですか。条件によって生じるから答えは違ってくる。いいですか。例えばAという人が質問したことに対しては、その条件で答えるからBしか返ってこない。答えは一つだ、必ず。

ところが、Cという人の質問に対してはDという答えしか返らないんだよ。ね。わかりますか。そして、この世はすべてからくりなんだ。ね、からくりとは今言ったように、同じ人間でありながら、わたしたちとアメリカ人とは違う、ね。これはからくりなんだよ、一つの。仕掛けなんだ。

◉わたしを利用しなさい

で、わたしは何をやらなければならないか。それはあなた方が引っかかっている仕掛けを解いてあげればいい。つまり、あなた方の我執、エゴというものに何色が塗られているか、それを知って外してあげればいい、ね。そうすると、あなた方は解脱するわけだ。わかりますか。解脱させるためにはそれしかないよ。

これは、今から、どんな聖者が出ても同じことを説くだろう。ね。そして時代、背景によって説くことが違ってくるだろう。例えば、釈迦牟尼みたいにね、禁欲を美徳としていた時代だったら、わたしも禁欲を説いている。ところが、今禁欲したら、それはアホだという。あそこは単なる観念論者の集団だという。そうだろう。そう思わないか。

つまり、わたしたちは、二十一世紀寸前に生きてるわけだ。今は釈迦牟尼の時代とは違う。イエス・キリストの時代とも違う。だから、わたしたちの舞台は違っているわけだ。二千五百年を隔て、あるいは二千年を隔て違っているわけだ。

だったら、過去のね、遺物がわたしたちに役立つと思うか。よく考えてごらんなさい。行法については役立つかもしれないよ。しかしだ、例えば今言ったとおり、二十世紀に生きているバグワンの本ですら役立たない、わたしたちには。ね。解脱している、リアライゼーションに到達しているクリシュナムルティの本ですらわたしたちには役立たないわけだ。そうだろう。

だったら、わたしたちは日本人はだ、日本人の気質に合ったからくりの説き方

しかない、これは。だから、もしあなた方が解脱したいと思えば、徹底的にわたしを利用しなさい。わたしは答えるから。あなた方が徹底的にやればやるほど――本質的な部分でだよ、意味のない質問じゃなくて――引っかかっている部分を徹底的にやればやるほど、あなたたちは苦しむだろう、おそらく。

それは、あなたたちは本当は知っているんだよ、答えを。わかるだろう、知っているっていう意味は。本質的には知っている。でもそこから逃げたい。わかるだろう。いいですか。だから、納得するまで徹底的にわたしを利用しなさい。そうすることによって、必ず解脱がくるだろう。そんな難しいものではない。今言ったとおり、たかだか、ね、六処を滅する。名色を滅する。識を滅する。行を滅する。そして無明を滅する。これだけだ。五つのプロセスしかない。だからわたしは、本気で頑張ったら早いという、解脱は。そんな難しいものじゃないという、ね。

◉上昇のプロセス——解脱へ

ところがだ、先程もちょっと話したが、昨日と今日、Aが来た。ヨーガの先生だ。で、わたしに言った。パイロット・ババはわずか七年で解脱したんですよと。わたしは二十五年やっています。インドで二十五年、三十年、ヨーガをやっている人はたくさんいますと。

わたしはそのときこう言った。その連中は一日二、三時間で、あとはピース、ピースと言って遊んでいると。ね。それはなぜか。今言ったのが正しい。つまり、彼らは一生懸命、怠惰という色を自分たちのエゴに塗りつけている。わかるか。そして行はろくすっぽしない。そして、この動いてるインド社会に生きている。解脱するわけないだろう。わかるだろう、言ってることは。

だから年数ではない。その人が本当に六処を滅する。そして名色を滅する。そして識を滅する。行を滅する。そして根本無明を滅する。そうすると解脱に至る。大したことはない。ファイブステップだ、わずか。いいですか。これが解脱のプロセスだ、釈迦牟尼の説いたね。

そして、その無明を滅するプロセスが、信、ね、これはもう、一回出たからわかるね。まず信じる、徹底的に信じるということ。これは肉体、魂、精神、すべてをグルに捧げるということだ、言い方を換えれば。そこまでできるかどうかだ、まず第一は。

そして、悦、ね、これはクンダリニーの覚醒によって背骨が気持ちいい状態だ。そして、喜、ね、それはツァンダリーの状態で、上から下に落ちてくる状態だ。そのとき非常に気持ちがいい。これは後ろから上がるのは性感に似ていて、前から落ちるのは平安だ。それによって安定する、すべてが。それは軽安だ、ね。そして、深い瞑想に入ることができる。これは楽だ、ね。そうすると、一つのものに精神をずっと集中し続けられる、ね。そしてサマディに入る。三昧だ。それによって、この世がどういうふうにできているか、すべてを知ることができる。それが如実知見だ。

そのプロセスに入ると、もうこの世のものすべてがわたしのものではないということを悟る。いいですか。そして、遠離するね。離れる、すべてから。そして

すべての貪りを捨てる。その状態が解脱だ。

だから、三昧から二つのプロセスがある、ね。その一つのプロセスは何か。これは、すべてを知るということだ。いっさいを知るということだ。例えばわたしはここにいる人たちのすべてのカルマを知っている。それは何人かに試しているはずだ、わたしは。それは、あなた方と話さなくともわたしにはわかる。

その次の段階が遠離、離貪のプロセスだね。つまり、すべてから離れて貪らないと。仏教ではね、断食を否定しているんだよ、釈迦牟尼はやったけども。それはなぜだかわかるか。アホな連中は何でもかんでも、すぐがむしゃらにやる。いいですか。そうするとだ、例えば断食した後、ものすごく食べてしまう、ほとんどの連中は、精神が弱いから。それによって逆にね、餓鬼道のカルマをしょってしまうんだ、ね。

だから、仏教では一日一食（いちじき）といっている。それは一食で生きていけるから。この肉体を保持できるからだ。その状態がある程度過ぎると解脱する。解脱すると、君たちはわからないだろうが、この世は夢だ。本当に夢を見ている状態だ。わた

しがあなた方とこうやって話している、これもわたしにとっては夢だ。そして瞑想、三昧の状態のときだけがわたしにとっては真実だ。いいですか。

この中で、真の目が開いている人は、わたしがわかるだろう。真の耳が聞こえている人は、わたしの声が聞こえるはずだ。

よし、以上で今日の説法を終わります。

一九八六年九月二日　丹沢・集中セミナーにおいて

◆第四話　何ゆえに苦界に生まれたか？

「詳説・十二縁起の法」

◉苦界へのプロセス――十二の段階

今日はね、縁起の法について考えてみよう。これはちょっと難しいよ。わたしたちは何ゆえにこの苦界に生まれたのであろうかというね、生き物が苦界に生まれ出た理由というか、プロセスを追って解明しているものなんだよ。苦界というのはね、欲界・色界・無色界の三界を指しているんだ。わたしたちが現在いる人間界はこのうちの欲界に属している。したがって苦界の一つなんだね。

苦界に入ったプロセスは次のようになる。ざっと流すよ。無明ありて行あり。行ありて識あり。識ありて名色あり。名色ありて六処あり。六処ありて触あり。

触ありて受あり。受ありて愛あり。愛ありて取著あり。取著ありて有あり。有ありて生あり。生ありて苦あり、とね。こうしてわたしたちは迷いの生を受けるんだと、釈迦牟尼如来は言っている。ちょっと今日の講義は難しいからね。まだ、わからなくてもいいよ。今から一つずつ正確な意味合いもね、含めて説いていくから。

◇無明ありて行あり

じゃあ、まず、無明ありて行ありとは何か。ね。はい、君、無明ありて行ありとは何ですか。

（信徒A） 無明ありて行ありですか。

（尊師） はい、そうです。

（信徒A） 無明とは無智のことです。

（尊師） それは、言葉の遊びだ。無明が無智になろうとだよ、同じだろう、それは。言葉を理解したことになるか。無明とはどういう状態かとわたしは聞いてい

る。

（信徒B）真理に疎いことです。

（尊師）真理に疎い。おお、いいねえ、なかなか。では真理とは何か。

（信徒C）絶対自由。

（尊師）絶対自由、それと？

（信徒C）絶対幸福。

（尊師）なかなかいいね。

真理というものは、わたしたちの真我が独存に入っていることだ。このとき、絶対自由であり、絶対幸福であり、絶対歓喜という状態なんだ、ね。そして不滅でもある。いいかい。これが真理なんだよ。わたしたちの真我は、本来この状態であった。

ところがね、その独存の状態にあった真我にね、三グナが干渉し出したんだ。その三グナの干渉によって、三グナは判断を誤り錯覚を起こしてしまった。それが無明なんだ。ここにわたしたちの苦に至るプロセスが始まってしまった！

◇行ありて識あり

次に、判断を誤り錯覚を起こした真我は、一見美しく楽しい世界、自由な世界へと入ってしまう。そこはコーザル世界と呼ばれている。ここから行へと移ったわけだ。行とは動くという意味だよ。行には身・口・意の三つがある。身は動くことができる、口はしゃべることができる、意は考えることができる、という意味だ。つまりね、もともと真我は自由に動くことができ、しゃべることができ、考えることができるということだ。

行の段階で、真我は今述べた身・口・意を使って経験を始める。この経験の舞台となるのはコーザル世界だ。コーザル世界とは、精神と観念だけで成り立っている世界だよ。

真我は、コーザル世界での経験をし尽くすと、今度はアストラル世界へと入っていく。経験し尽くして飽きてしまったコーザル世界より、未知のアストラル世界の方が素敵だと、またもや錯覚してしまうんだね。アストラル世界とはイメージの世界、高次元の微細な世界だよ。

◇識ありて名色、六処あり

このようにして、アストラル世界へと入った真我が、ここで経験をしていく段階が識なんだよ。

経典ではこういう表現にはなっていない。しかし、実はそれが六識という言葉で表わされているんだ。この六識が何を指しているかというとね、まず、アストラル世界で見るヴィジョンね、聞く音ね、それからにおい、味覚、触覚、そして思いの六つだ。

もう一度言うと、行はコーザル世界で経験していくプロセス、識はアストラル世界で経験していくプロセスなんだよ。

それでね、アストラル世界での経験が終わってしまうと、真我は前と同様に、この世へと入って行ってしまう。このとき、わたしたちは粗雑次元の五大エレメントを使って、この世に生まれ出るというわけだよ。この段階が名色と呼ばれている。

名色とは何か。これは五蘊を表わしているんだ。五蘊とは五つの集まりという

意味。その五つとは何か。難しい言葉を使うならば、色・受・想・行・識の五つだ。これをわたしたちが使っている言葉に置き換えるとだ、色は粗雑次元の五大エレメント、受は感覚、想は表層意識、行は深層意識、識は判断を表わしている。この名色の段階では、真我が五蘊に干渉してしまうんだ。つまり、五蘊を思い通りに動かし始める。より良い生活を求めてね。

そして名色ありて六処あり。六処は、名色が具体化するだけなので、同じものと考えても差し支えないだろう。六処とはすなわち、目・耳・鼻・口・触覚・意識だよ。

◇六処、触、受、愛

そして、これらが外界と接触する。接触すると、そこでいろいろな感情の動きが出てくる。これが、六処、触、受、愛のプロセスだよ、ね。まず、六処が外界と接触する。これが触。それによって、感覚器官が働き、いろいろな外的情報が入ってくる。これが受だ。ここで愛着が生じる。これを愛といっているんだね。

わたしたちはこの愛着、言い換えれば執着から離れられない。修行によって離れるしかない、とわたしは何回となくあなた方に言ってきた。その愛着は、このように真我の経験から生まれたものだったのだ。いいですか。なぜ、わたしたちに愛着、執着があるか、その理由はこれでわかったね。真我が経験をし始めた当初である、無始の過去から、わたしたちは愛着を増加させてきたんだよ。

例えばここに女性が十人いてね、わたしたちに無数の過去世において積み上げた経験が全くなかったら、特定の人を美人とも思わなければ、ね、醜いとも思わないしね、普通とも思わないよ。しかし、実際は受ける印象が違うだろう。しかも、それぞれ、つまり一人一人の真我の経験は違うものだ。人は経験を判断基準としている、というわけで、〝好み〟の女性のタイプも一人一人違うんだね。例えば、A君が「B子さんて美人だねえ」と言ったら、C君は「何だい、あんなチンクシャ。趣味悪いぜ」と答えることもあり得る、ね。

◇愛ありて取著あり

これを愛といっているんだ。愛着、執着だよ。いいですか。釈迦牟尼如来はこう言っている。「六つの入口から愛着のもとが入ってきますよ」とね。この六つの入口が、先程述べた六処、すなわち目・耳・鼻・口・触覚・意識のことなんだよ。

愛着してしまうと、今度はこれにとらわれてしまう。これが取著だ。

例えば、いいですか。あまりにも宗教的な本ばかし読んでだ、理解はしていない人がいたとしよう。これこれこういうことをすると天界に行けるなんて思い込んでしまったら、また、悟れるんだと思い込んでしまったら、それにとらわれてしまう。これは意識による取著だ。

ね、あるいは、今まで会った美人がみんな優しかったと。すると、美人イコール優しい人だと思い込んでしまうかもしれない。これがとらわれだ、取著だ。

ね、いいか。たまたまバナナを食ったら、おなかを下してしまったと。それが三回も続いたと。そうすると、バナナを食べたら下す、と思う。これもとらわれ

だよ。ね、いいかな。いっさいのとらわれが愛着から、あるいはアンチ愛着から始まる。ね、これが取著だ。

◇取著ありて有、生あり

取著があると、欲求する。もっと欲しい、もっと良くしたい、もっと満足したい、とね。すると、真我は自分の欲求に動かされて、物を作り出す。わたしたちの欲界でもその作業は続けられているんだね。征服欲がいまや核兵器さえ生み出した。楽をしたいという欲求は、電子レンジや洗濯機、ガスや水道を作り出した。ラジオができた。テレビができた。自動車ができた。飛行機ができた。これらは、みんな真我の欲求が作り出したものなのだ。その作り出して、自分の世界を満足できるようにしていく段階、これを有といっている。有だよ。

有はどんどん深みにはまっていく。欲は欲を生むからね。死んでも原因となっている愛着とこだわりは消滅しない。カルマとなって残ってしまうんだよ。そうなると、カルマによってこの世に再生する。これが生だ。

◇生ありて苦あり

そうして、わたしたちは生まれ出て苦を味わうことになる。これが生あるがゆえに苦ありなんだ。じゃあ、どうして苦を味わうのか、ということについても説明しておいた方がいいかね。ちょっとね、もともとのプロセスを思い出してごらん。屈折しているだろう。とらわれから生まれ変わっているわけだからね。とらわれていたら、正確にものを見ることができない。だったら幸福になれるはずがないんだよ、ね。

苦あるがゆえに凡夫はいっそうね、愛着し取著し、楽しみを求め、いっそうの苦しみに入る、ね。それをわたしたちはもう何生も何生も気が遠くなるほどの生をね、繰り返してきたんだよ。

しかし、わたしたちはこの世に生まれてきたから苦しまねばならない。例えば、病気をしたり、年を取ったり、ね。あるいは悩みを持ったり、ね。要するに、苦はすべてのプロセスのまとめなんだよ。で、苦から離れなくてはならない、と気づいたら、今度は『生死を超える』（オウム出版）のプロセスだな。これは、わ

たしの本に書かれているからここでは簡単に触れるのみとするよ。

◉苦から六ヨーガ

　このように、今、あなた方の魂はオウムに集まってきている。あなた方の魂は、そこで苦から抜け出そうと考える。苦あるがゆえに信あり、あなた方は麻原の教説を真理だと信じてオウムに集まった。ね、そして一生懸命修行しようとね、いいですか、あなた方は悟りと解脱のプロセスを歩き出すわけだ。

　信を基礎とした修行によって、クンダリニーが上昇し、悦が生じる。悦が生じてくると、わたしたちの背骨にあるね、スシュムナー管、イダー管、ピンガラ管、この三つの管を浄化する。そして、三つの結節を破るんだ。

　まず、マニプーラ・チャクラの裏側のブラフマ結節、それから、アナハタ・チャクラの裏側のヴィシュヌ結節ね、そして、後頭部にあるシヴァ結節を破るわけだ。最後にサハスラーラ・チャクラが崩壊する。すると、ツァンダリーが起きる、ね。いいですか。

ツァンダリーは、わたしたちの過去世からのけがれを浄化する。これが喜だ。そして、ここを通過するとね、軽安、楽と進む。ま、楽というのは、長く座れ瞑想に適している状態だ。この時期に三昧に入ることができるようになる。このとき、心臓は若干動いている。しかし、聴診器ぐらいではわからない。これが三昧だ、ね。

三昧に入ると、その人の精神的レベルによって、いずれかのチァクラから魂が抜け出す。ね、そして六ヨーガが生じる。それはわかるね。読んでない人は『生死を超える』を読んでくださいよ。わかるから。バルドー、夢見、幻身、ね、光ね、そしてポアだ。あれ、これでは五つだ。一つ足りないじゃない、ね。杉本(現在のガンポパ師)、何が足りないか。

(杉本) 熱です。

よし。なぜわたしが六ヨーガの中に熱を入れなかったかというと、既に上昇させるプロセスで熱のヨーガが入っているんだよ。ベースにあるわけだ。

さて、この六ヨーガによって、わたしたちはいっさいを知ることができる。ね、

如実知見だ。そうすると、わたしたちのね、無明から始まってこの世に再生してくるプロセスがだよ、よくわかるようになる、ね。

そして、「ああ、こんなのは嫌だ。離れなければならない」と切実に思うようになる。そして遠離ね。それから離貪ね。それが終わった段階で、わたしみたいに解脱するんだよ。

いいかな、これが釈迦牟尼如来のお説きになった縁起の法だ。ねえ、簡単だろう。それから、わたしがふだん言っていることと少しも矛盾しないだろう。だいたいね、真理というものがね、矛盾するのがおかしいんだよ。そうじゃないか。チベット仏教だって、原始仏教だって、ヨーガだって、同じことを目指しているんだよ。真理を追求しているんだ。

◉真理は一つ

仏教とヨーガのプロセスが同じことに気づかない人がいるかもしれない。では、パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』をサッサッサッと見てみよう。『ヨーガ・

スートラ』には――これはラージャ・ヨーガなんだけれどね――こう書かれている。一に、悪いことを極力しないようにしなさい。二に、いいことを徹底的にやりなさい。三に、座法を安定させなさい。四に、調気法によって心を制御しなさい。五に、いっさいの感覚を外界から引き離しなさい、とね。そして、精神集中、それから瞑想、超覚醒というね、八つのプロセスを歩くわけだ。

非常に似ているね。ふだんわたしが言っている六つの極限の実践と非常によく似ている、ね。つまり、パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』も、大乗仏典の六波羅蜜の六つの極限の修行も同じことを言っている。わたしが先程言った縁起の法ともダブッている。

だいたい真理を示しているものにね、矛盾があるはずがないんだ。

一九八七年五月二日　和田平・集中セミナーにおいて

◆第五話　迫りくる危機に備えて！

「アストラル世界の浄化を」

◉わたしなりの救済

わたしたちの身体というものは、大きく分けたら三つの世界と関係しているね。三つの世界とは何かというと、まず現象界、それから粗雑な世界から微細な世界ね、つまりアストラル世界と、そして原因のコーザル世界という三つのパートで成り立っているわけだ。ね。そして、それに対応する身体というものは、七つあるわけだけど、今日はそこにはあまり触れないね。なぜ触れないかというと、十二月の二十五日か、『マハーヤーナ・スートラ』（オウム出版）という経典を出します。これはオウムの経典です。だから、それをよく読んでください。

で、本題は、ここです。ここにコーザル世界があって、イメージのアストラル世界があって、現象界があると。ね、コーザルの世界はデータであると。このデータには、善も悪もあるわけだ。そして今、人間界に悪影響を及ぼしているのは、悪の方が強いわけだね。そうすると、悪のデータというものは、アストラル世界に影響を与えて波打たせるわけだ。ね。もう一つ善なるエネルギーというのも同じように、アストラル世界に波打たせるわけだ。そしてそれが、この粗雑なわたしたちの世界に影響しています。

だから例えば、わたしがなぜにおい、あるいは甘露水による味とか、あるいはなぜ音楽を使うとか、ね、あるいはなぜこういうグヤサマジャ、これあのう、ね、スケベな人が見たら非常にスケベな絵だけども（笑）、実際はものすごく崇高な絵なんだね。まあ、それも後で、もし忘れなければ説明するとして。なぜそういう刺激をあなた方にわたしが加えているかというと、それは、このコーザル世界、あるいはアストラル世界の波というか、情報というものの量をね、皆さんに、大量にいい情報というものを提供しようと考えているからなんだ。

つまり、わたしはもう既にわたしなりの救済、わたしなりの戦争を始めているわけだ。そのわたしなりの戦争、あるいはわたしなりの救済とは何かというと、できるだけ皆さんを高い世界へ、上昇の世界へ導くためにはどうしたらいいかということを考えているわけです。

そのためには、例えば、旧態依然のね、説法をやったところで、だれが聞くかと。ね。例えば、わたしがシャクティーパットをやろうとしても、それには限界があると。ね。わたしたちは、五感によって縛られているわけだから——五感というものは、目、耳、ね、それから鼻、口ね、そして触覚という五感だね——五感によって縛られているわけだから、その五感を逆に利用してあげて、あなた方を高い世界へ導こうじゃないかと。ね。

しかしね、まだまだ、アストラル音楽が流れている時間と、ね、それから演歌や歌謡曲が流れている時間を比較したらだよ、負けているね、まだ。これは、やっぱり、もっと会員の人たちが頑張ってくれないと困るね、これはね。例えばにおいもそうだね。単に性欲をそそる香水と、ね、今わたしたちが開発しようとして

いる、何ていうかな、においのたまて箱というのかとの比較をしてみても、やはり負けているね、これは。しかし、これから八年後、十年後には、必ず勝つだろうと考えている、わたしは。それは、今の時期がね、選択の時期だからなんだよ。

◉大きな波——オウム真理教

いったい、何を選択するんだと。ね。それは、あなた方が下降の世界に入って行って、ね、三悪趣に生まれ変わるか、あるいは上昇の世界へ入って行って、天界、あるいは成就というね、あるいは解脱というステージを歩いていくかと。この二つのラインがあるわけだね。まあ、キリスト教では〝審判のとき〟といっているけど、要するにそれは同じことだね。上昇の傾向に行くのか、下降の傾向に行くのかと。

そしてこれがね、まあわたしは『トワイライトゾーン』で大予言みたいなのを書いたわけだけども、その中で、二〇〇三年に核戦争が起きますよといっているね。それから、一九九九年には、局地戦が激化すると。それが、一九〇〇年には

日米の経済摩擦、完全なね。それから、九三年には日本の再軍備だといっているよね、一応。で、まあ、外れた予言もあるかもしれないけど、例えば三原山がもうしばらくは大丈夫だといって、わたしは説法の最中に、ま、三原山はもう一回爆発しますよといって爆発したみたいだけども、そういう形で当たっている予言の方がほとんどであると。ね。

で、そういう状況をすべて考えたならば、じゃあわたしたちには破滅しかないのかと。ところが、そうではないよね。例えば、ここに平らな水があって、この平らな水を波打たせるとね、どうなる。高い波と低い波があると。つまり、これは選択なんだね。一方は高いわけだよ、平均からしたら。一方は低いわけだ。ね。アストラルの世界も同じであるし、現象の世界も同じだね、これは。

つまり、波打っているときというのは、必ず正と邪というものが、ね、中心から見て、上下のものが登場するわけだよ。そして、今ほど濁った世の中はないから、言い方を換えれば、今程、ね、プレーンな状態があって、下がっている時代はないから、当然、とてつもない大きな波が押し寄せてこなければならない。ね。

そして、その大きな波は、わたしはオウムだと確信しているんだ。それは、わたしが、ね、シャンバラに行ったときの、まあ、わたしの同胞たちとの話し合いとか、あるいはシヴァ神とのコンタクトとか、いろんなことを総合しても、オウム以外あり得ないと考えています。ね。それは、まだオウムの会員というものは、二千名弱しかいないけども、その二千名弱の会員の霊性、あるいは智性、あるいは教養をね、採ったら、どの宗教組織にも負けない、いや、もうそんなの雲泥の差みたいな人たちが集っているわけだから。

ま、もし、オウムが救済できないようだったら、もうこれはすべてが崩壊するしかないと。ね。つまり言い方を換えれば、あなた方はその使命をしょっているわけだね。いいですか。

◉大乗の役割

そして、わたしたちのやらなければならないことは、まず、コーザル、データの浄化、ね。次、アストラル、イメージの浄化。この二つを徹底的にやっていこ

う。というのはね、なぜ現象界の浄化をやらないのかというと、もうここは負けているんだよ、初めから。で、わたしたちがアストラルに影響を与えない限り、この現象界は変わらないんだよ。

じゃあ、わたしはいったい何を言いたいのかというとね、例えば本を見開いてごらん。守護神を持てとか、守護霊の話とか、ね、例えば霊障の話とか、ね、あなた方が今まで知っていた宗教というのは、みんなもう低位アストラル界の、餓鬼道とか、動物界とか、人間、人間界の下位の世界、あるいは地獄の世界と。こういう世界の通信を受けた、俗にいわれるところの聖者方の書いたご本をお読みになって、ああこういう怖い世界があるんだなという印象をお持ちになって、ね、そして、まあ宗教生活に入られたわけだ。ね。ところが、こんなものをいくら相手にしていても、わたしたちの霊性の向上というのはないわけだね。いいですか。

じゃなぜその人たちが、そういう影響を受けて本を書いたかというと、今人間界とつながっているアストラルの世界も、かなり下降の傾向にあると。ね。これはわたしがよく話すことだけど、テレビ番組をひねってごらんなさい。まず殺し

合いの場面、次はセックスの場面、そして食い物の場面、これ以外は今ニュースしかないよね。

で、こういう情報だけを入れて、つまりこれはコーザルのデータだとしましょう。そして、ね、イメージ化したアストラルの世界をあなた方が持っているとしたならばだよ、あなた方はどうして神聖なイメージをね、持つことができようか。というのは、あなた方が選択の余地のない様態をつくられているわけだね。これを食ったらうまいと、例えば。ね。例えばこうしたら楽しいと。例えば嫌なものは殺してしまえと。そうでしょう。

だから、そうではなくて、まずあなた方のアストラルを浄化しなさいと、周りの人のアストラルを浄化しなさいと、周りの人のコーザルを浄化しなさいという方法しかないわけだね。そして、これが、今生での大乗の役割だと考えています、わたしは。いいですか。

◉小乗のニルヴァーナへ

はい。それから、もしそれが嫌な人、もうそんなのはどうでもいいよと、ね、そんなのはとにかくどうでもいい、自分だけ安穏な世界、平和な世界へ入りたいんだという人に関しては、ね、まあ、『阿含経典』の根本経である「如来経」とか、あるいは「五蘊無我の経」とかね、そういうものをお読みになって実践なさると。

これはどういうことかというと、まず、ね、わたしたちの肉体というものを滅しなさいと。ね。肉体に対する執着を滅しなさいと。ね。肉体に対する執着を滅することによって、わたしたちは、この現象界から、ね、少なくとも離れる準備ができましたよと。これは、「色は無常なり、無常なるがゆえに苦なり」というプロセスだね。今度は「苦なるがゆえにわたしたちは遠離、離貪しましょう」と。いいですか。そして次にくる、ね、肉体を離れたんだったら、次は感覚も離れましょうよと。ね。

これは、ヨーガでいうところのプラティヤハラだね。制感といわれている状態。

ね。これは、経典では、ね、受は同じように無常なりと。無常なるがゆえに苦なりと。苦なるがゆえに遠離、離貪して解脱しましょうと。ね。わたしたちは肉体を捨て、感覚を捨て、ね、それからわたしたちの直接、行動の原因となっていると思われている表層意識、ね、同じように、想は無常なりと。想はね、無常なるがゆえに苦なりと。苦なるがゆえに、同じように離れましょうよと。解脱しましょうよと。で、この、色・受・想というこの三つがね、何かというと、粗雑な世界を構成しているわけだ。ね。わたしたちの認識レベルなんだよ、これが。

それじゃ次に、釈迦牟尼は何をお説きになったかというと、ね、アストラルの世界である、イメージと意志の世界をお説きになったと。じゃあ、それは経典でどうなっているかと。ね。行、つまりわたしたちのイメージというものは無常なりと。ね。無常なるがゆえに苦なりと。苦なるがゆえに遠離、離貪して離れましょうよと。ね。そして最後に識でしょう。意識でしょう、わたしたちの。わたしたちの意識というものは、同じように無常だ。無常であると。無常なるがゆえに、ね、苦であるから遠離、離貪して離れましょうよと。

そうすると、この色・受・想・行・識――はい、じゃ引き算をしましょう。いいですか。この行・識はアストラルだ。そして、色・受・想。この三つは現象界だ。じゃあ引き算だよ、コーザル界・アストラル界・現象界から、ね、アストラル界・現象界を引いたら何が残りますか。何が残りますか。

（信徒）コーザル界ですか。

そうですね。コーザル世界が残りますね。そうすると、釈迦牟尼がコーザル世界をニルヴァーナといっていらっしゃる。ね。はい、これでヒナヤーナ、小乗の到達点がコーザル世界であることがわかったね。

じゃ、なぜ麻原は、色・受・想、これはもうOKと、行・識をアストラルだといえるんだということになる。ひょっとしたら意志はコーザルかもしれないじゃないか。ところがそうじゃないよね。わたしの経験からいっても、アストラルに意志の光球と、それからイメージの光球があるし、それから、ねえ、ヨーガの経典にも意志の光球とイメージの光球はアストラルにあるわけだ。ね。それから、『ヴェーダ』という古い、やはりヨーガというか、インド全体の経典があるわけ

だけども、その経典にも、アストラルの世界の中に意志の光球と、ね、それからイメージの光球があるわけだ。ね。

これから考えると、どうも釈迦牟尼は、ね、途中までしか説いていらっしゃらないということになるよね。そうでしょう。わたしたちはニルヴァーナに入れば、確かにコーザルの世界に入ることができるわけだ。そうすると、コーザルの世界というものはデータしかない世界だから、ね、光しかない世界だから、いいですか、わたしたちに苦しみはないと。そこにイメージもなければ、行為もないわけだからね。そこでカルマの法則は遮断されてしまう。ね。しかし、このニルヴァーナというものは、確かに苦も楽もない世界だ。自由じゃないよね、でもここでは。わかりますか。

◉コーザル世界を浄化するプロセス

じゃあ、次のマハーヤーナの究極、完成とはいったい何だということになってこよう。ね。これは、わたしたちのコーザル世界のどのパートに行くのかという、

ね、そのための修行法が説かれているんだよ。つまり、コーザルレベルの修行法が説かれているわけだね。ちょっと待てよ。その前に、わたしたちは検討しなければならないことがある。それは釈迦牟尼は、コーザル世界へ行く、ニルヴァーナこそ最高だと考えていたのかと、釈迦牟尼の修行レベルはそれだけだったのかというと、そうではないね、これは。じゃあそれはなぜいえるんだと。そういえるんだと。

それはね、今日の説法というものは、すごく根本的なことだから、難しいかもしれない。あなた方には興味があることは質疑応答でやるから、まあとにかくしゃべらせてくださいわたしに。いいですね。

まず、いいかな、十二縁起の法というものがあるね。これは、まず無明からスタートしている。ね。で、無明の状態とは何かというと、これは、わたしたちの真我というものは下位のコーザルにいたんだと、光の射さない下位のコーザルにいたんだという考え方をするならば、すごくつじつまが合うわけだね、これは。ね。そうすると、真っ暗闇、つまり禅的ないい方をすれば無だ。ね。そうすると、

わたしたちが生まれてきたのは、どうも、禅で到達したがっている無、ここからスタートしたみたいだ。そうすると、禅はまた無に帰っていくと。ね。まあ、そこらへんは飛ばそうか。

その無からスタートしたわたしたちの真我は、無はやはり面白くないと。そこで動きが生じてきたと。これは行だね。そして、動きが生じたことによって、六識が生じたと。六識というのは、真我のもともとの素量の中に、ね、目、耳、鼻、口、ね、それから触覚というものがあるわけだから、それと意識というのがあるわけだからね——これを六識といいます——六識が生じてきたと。ね。

そして、それが、アストラルに現われた段階で名色の段階に移行してくると。このときに微細な物質を使って、わたしたちは六処を形成すると。ね。そして、それが、外界と接触することによって——なぜ外界と接触できるかというと、自己の意志によってすべてはつくり上げられるわけだね、イメージの世界というのは——だから、外界と、自分でつくった自分自身と、イメージでつくり上げた外界とで接触することによって愛着が生じてくると。

愛着が生じてくることによって、ね、とらわれる。ね。とらわれることによって、わたしたちは、ね――ここは一つ大切なことだね。一般的に仏典では、有の世界へ生じるというのの有というのを、この欲界・色界・無色界だといっているけども、今のわたしの感想では、これは一応現象界だというふうにとらえると楽だろうと考えています。ね――とらわれの強烈さによって、わたしたちは、粗雑な次元までも影響を与えて身体をつくってしまったと。これがわたしたちの苦に至るプロセスです。ね。そうすると、釈迦牟尼のその五蘊無我の法の延長上に、また無明の状態に戻っていくとしたならばだよ、ねえ、結局は意味がないわけだ、それは。ね。

じゃあ、この無明を照らすには何かというと、大乗の修行でいわれている功徳なんだね。つまり、功徳を積むことによって心が浄化されると。あるいは、光の世界を求めることによって光は生じるという理論から、ね、わたしたちが明（みょう）の世界に入るためには、明かりの世界に入るためには、わたしたちは徹底的に功徳を積んでこのコーザル世界のデータを浄化しなければならないわけだ。いいですか。

ね。この浄化するプロセス、これが大乗なんだね。

◉カルマ落としすら利用するタントラ乗

じゃあ付け足しでもう一つ。タントラ乗というものがある。ね。タントラ乗というのは、タントラヤーナといわれているね。このタントラ乗というのはいったい何だと。ね。タントラ乗というのは、もちろんマハーヤーナの、ね、功徳というものがベースでありながら、その上に今度は自己の煩悩というものからね、離れて離れて離れて、避けていくんじゃなくて、その自己の煩悩、カルマを落とされることをすら利用して、自己の成就に向けようじゃないかと。ね。これがタントラ乗なんです。いいですか。

◉オウム真理教の三つの乗

そして、オウムは、その三つの乗を持っているわけだね、一応。ヒナヤーナ、もう自分だけ幸福な世界に入りたい人は、さっさとニルヴァーナに入ってくださ

いと。ね。功徳を積んで器を大きくして光の世界に没入したい人は、マハーヤーナへ行きましょうと。ね。そのマハーヤーナのスピードをより速くしたい人は、タントラ乗ね、タントラヤーナでいきましょうと。これが、今のオウムの仕組みだね。

はい、そして先程の話に戻すよ。救済はいいと。とにかくあと五年、八年、十年後に日本が変わるんだったら、わたしはもうその影響を受けないんだと考える人は、徹底的にすべてから離れなさい。ね。離れるというのは、ここに苦がありますよと。その苦があったとしても、それは見向きもしないで、できれば遠ざかると。ね。

ひょっとしたら十年後に、苦界にまだ残っていて苦しむかもしれないけど、周りの人、あるいは他人、ね、この人たちも一緒に、ね、連れていきたいと、救済したいと考える人は、ね、苦界へ飛び込みなさい。そして、アストラルの浄化をしなさい。ね。いいですか。

そうではないんだと。俺はもう功徳に満ちあふれていると、ね、俺は功徳の天

才だと、ね、いかなる修行についてもOKだと、早く成就して大乗の仏陀になるんだという人は、今度はタントラ乗だね、タントラヤーナに入りなさい。ね。

そして、この三つのプロセスの中でだよ、いいかな、あなた方がいったいどれに合っているか、ね、よく考えて修行するんだよ。ね。大内（現在のプンナ・マンターニプッタ正悟師のこと）の先導を受けてだよ、「いやあ、大乗だ、大乗だ」と思ってずーっと九年間きたと。ところが十年目でドバーンときたときに、ね、光ったときに、「あー苦しい、こら大内」という、恨みながら死んでいったと（笑）。これじゃしょうがないからね。

いや実際いるんだよ。あのね、弟子のある者がね、まあ弟子入りしてすぐ、「先生、実はわたしはヴィジョンを見たんです。」

「どういうヴィジョンだ」と。

「先生、実は他の人はどんどん出世していって、自分だけシャクティーパットやってボロボロになるヴィジョンなんですよ」と。

「あ、それは素晴らしいね。」

と、話をしたわけだ。

ところが、入って修行していくうちに、自分のことすらできなくてフウフウ言ってる。ね。で、

「お前は、シャクティーパットやってボロボロになるんじゃないか」と。

「いやあ、先生、わたしは弟子から会員に下げてください」と。

そういう例もあるわけだ。

だから、よーく自己のカルマを見つめなさいよ。ね。そして、苦痛を味わいたくなければ、早く小乗のヒナヤーナに入って、ニルヴァーナに入ると。これはね、決して悪いことじゃないからね。

そうじゃないんだと。十年後、たとえ光が見えて、ね——まあ修行上光が見えるのはいいわけだけども。ね——実際に、目の前に光ってだよ、そして、その放射能に汚染されて、苦しくともみんなを救済して高い世界へ連れて行きたいんだと考える人は、ね、とにかくアストラルの、あなた方の浄化をしなさい。そして、ね、周りの人の浄化もできるだけしてあげなさいと。ね。

もう一度言うよ、最後に、ね、ほんとにもう功徳に満ちあれている人は、さっさと、タントラヤーナによって、ね、このグヤサマジャになりなさいと。

◉グヤサマジャの意味合い

はい、このグヤサマジャについての説明をしておくならば、これは別にあのう、ほんとにいやらしい絵じゃありません、これは。ね。これは、わたしたちが、五大といわれている、地・水・火・風・空ね、この意味合いがあるわけだけども、これはまあ、一般的には意志とか、性力とか、智性とか、ね、そういう意味合いがあるわけだけど、それをすべて成就された、このグヤサマジャが、ね、三つの煩悩を利用して、あなた方のアストラル・ボディーをつくっていると。つまり、あなた方の報身をつくっていると。つまり、あなた方の報身をつくるために純粋に結ばれていると。ダキニと。それがこのグヤサマジャの意味なんです。

中には、わたしに相談に来る人がいるんだよ。「これを見て、先生性欲がわくんです」と（笑）。ね。でもそれは素晴らしいことだね。なぜかというと、それ

はやっぱり、タントラ向きの人でね、その性欲を上昇させなさいとよく話をするわけだけども、でも、できたら性欲は持たないでほしい。いいね。

わたしたちに残された時間というのはあまりないよ。だから、急ピッチで救済活動をやらないと。そのためには、あなた方一人一人が自覚を持って、ね、結果を出すようにしましょう。

一九八七年十一月二十九日　大阪支部において

◆第六話　オウムは世界最高の宗教

「聖者の生き方」

◉現代人のとらわれ

わたしたちは無明である。無明とはいったい何か。それは、真実の光が全く射し込んでいない状態。よって、何がわたしたちに利益を与え、何がわたしたちに苦悩を与えるかということがわかっていない状態ということになる。そして、この無明というものによって、わたしたちは正しくない三つの行為を行なう。

それは、この現象界において、あるいはアストラル世界において、あるいはコーザル世界において、身・口・意という三つの道具を使って行為を始める。そして、そこで正しくないデータ、情報とぶつかり、あるいは見解に到達して、ね、より

いっそう粗雑なものに、例えばコーザルだったらアストラルへ、アストラルだったら現象界へと落ちていくと。

そして、そこで生じた感覚器官によって、わたしたちは愛着をするようになると、ね。愛着というのは、これは好きであると、これは嫌いであると、これは納得できると、これは納得できないという見解に立つと。そして、それが高じてくると、とらわれると、ね。何に対してとらわれるか。それは、欲にとらわれたり、あるいは見解にとらわれたり、あるいは一つの法則にとらわれたりすると。そして、それによって、よりいっそう、その世界と固定されると。

例えば、現代人のとらわれは何かといったら、死後の世界は存在しないと。今生きているこの世界だけが真実なんだと、ね。これがとらわれであると。とらわれるがゆえに、そこに縛りつけられると。

例えば、この現象界にとらわれるがゆえに、どうだ、現象界にここにとらわれた人がいたとしてだよ、アストラル世界、コーザル世界のデータというものが入ってくると思うか、君たちは。どうだ。入ってこない。そして、ひどくなると夢す

ら見なくなると、ね。

そして、この完全に現象界にとらわれ、生まれ、そして、じゃあこの現象界は、どうだ、苦の集積か、それとも楽の集積かと。苦の集積であると。ね、苦しみ。しかし、幻影の楽を求め、幻影の快楽を求め、死んでいくと。そして、肉体が屍になっても、心はまだとらわれているから、次の生を受けるために、アストラルで翻弄されると。そして、また次の生を受けると。これを繰り返すと。これが凡夫であると。

ところが、聖なる流れに入っている者は、どうなるかというと、そこで例えば、現象界だけが真実の世界であるとも思わないし、あるいは、現象界、アストラル世界、コーザル世界があるとも思わないと。ただ、淡々と修行すると。そのうちに、アストラル世界の経験が出てくると。あるいは、コーザル世界の経験が出てきたときに、本当に確信を持つと。そして、たくさんの人が、そういう経験をしているとするならば、ね、次の聖者のタイプは、その世界はあるんだろうと確信をもって修行すると。そして、その世界に到達すると、ね。

ところが、先程言ったとらわれの強い者は、そういうのがあるといわれても信じないと。それは幻影にすぎないと、夢にすぎないというと。じゃあ、例えばその人に、夢とは何だと、幻影とは何だと聞いたとしても、それはわからないと。つまり、曖昧な言葉、曖昧な考え方にとらわれて生きているわけだね。

◉一つ一つをはっきりと

ところが、聖者はそうではないと。一つ一つをはっきりさせると。これはわたしの知り得たものであると。これはわたしはまだ知らないけども、先輩たちの知り得たものであると、ね。これはいろんな経典に書かれているけど、先輩たちの経験と違うからずれてると、ね。

そして、本当の信をもって、ね、修行に励むと。そこで当然、クンダリニーの覚醒が起こり、煩悩の昇華が起きると。そして、悦、喜、軽安、楽、三昧と至ると、ね。これは『生死を超える』をちゃんと読むようにしなさいよ。そして、三昧に至れば、この世だけではなくて、ね、アストラル世界にはもっともっと広大

な世界が広がっていると。そして、その世界を構成しているものが光であることがわかると。そして、ね、それによって、この現象の世界にとらわれなくなると。

それから、クンダリニー・ヨーガを成就すると智性が、ね、高くなってくると。それによって、もっともっと、ものの考え方が深くなってきて、ね、この現象界が三つの苦から構成されていることに気づくと。

それは何かというと、本質的な苦だ。例えば、痛みを生じるとか、あるいは、ね、ものすごく寒いとか、ものすごく暑いとかいう苦だね。それから、変化していく苦だ。これは何かというと、たとえ今は元気であったとしても、年を取ったら体は動かなくなると。これは苦であるという苦だ。変化する苦だね。あるいは、自分の恋人が若いときに美しかったとしても、年を取っていくと、ね、衰えていくと。それを見る苦だ、ね。それからもう一つは、欲求して得られない苦だ。これは、例えば愛する人がいたとして、その人が自分のことを振り向かなければ、苦しいという苦だ。そして、すべての現象は、この三つの中に必ず当てはまると。いいかな。これに気づくと。それが如実知見であると。

そして、すべてを知見したならば、ね、そこから離れると、ね。この現象界は苦であるからと離れると。これが遠離、離貪のプロセスだね。そして、貪りを離れたならば、解脱すると、ね。例えば、この肉体を持っていても、自由自在に肉体から離れることができると。そして、アストラル、コーザルと高い世界へ飛翔することができると。これが、アーガマの初めであり、終わりだ。

そしてそれに、大乗経典は、それが現実にね、この現象界に凡夫と一緒に生活していても達成できるように、六つの極限という提示をしたと。そして、タントラにおいては、それをより速く進めるために七つの過程というものを提示したと。

◉スーパー・ヒューマン・ビーイングに

そして、あなた方は、その三つ、アーガマ、そしてマハーヤーナ、そしてタントラ・ヴァジラヤーナという三つの修行体系の、ね、修行を今実践していると。これだけ素晴らしい功徳を持っているあなた方がだ、ね、少しぐらいの苦悩があって、そこにへこたれるということは、わたしは信じられない。

結果的には、すべてを決定するのはね、この世を苦と見切ることができるかと。そして、信というものを培うことができるかということがポイントとなろう。なぜならば、君たちが成就するためのの第四番目のステップね、これは大乗のステップの第四番目だ。精進（しょうじん）であると。そして第五番目のステップ禅定（ぜんじょう）、つまり瞑想であるということができる。

ここにおいては、ね、オウムは世界最高の宗教であるし、最も激しい宗教だから、最も激しい瞑想、最も激しい修行をさせられると。成就前には二十一時間以上の修行を課せられると、ね。そして、グルが意思しない限り成就はしないと。

そうすると、十日、一カ月、二カ月、三カ月と過ぎていくうちに、この苦悩というものが永遠に続くんではないかという錯覚を起こすと。実際に永遠に続く苦悩などというものはないね。だから、今日から、ね、君たちが成就するまでの二十一時間の修行に耐えられるための準備をしよう。

そして、今いろいろ苦しみが出てくるのは、それは浄化が起きているからなんだと。しかも、例えば立位礼拝の修行にしろ、ワーク（出家修行者の奉仕行）の

修行にしろ、ね、二つのメリットがあると。一つは、そこで苦しいとき、カルマが落ちていると。一つは、詞章を唱え、帰依することによって、最高の功徳を積んでいると。ね。そして、そう考えたならば、君たちの修行というものは進んでこよう。

三日より一週間、一週間より十日、十日より一カ月と、少しずつ少しずつペースを上げていこう。一カ月より半年と、半年より一年と、一年より三年と、三年より七年とね、ペースを上げていこう。

そして、その修行を君たちが続けているうちにだ、君たちはスーパー・ヒューマン・ビーイングになると。超人類になることができると。そして、それを別名、ね、仏陀だとか、あるいは阿羅漢だとか、ね、あるいは神だとかいうことができるようになろうと。

わたしは、君たちの本質的なカルマというものを信じます。君たちも、シヴァ神とグルを信じて、確信をもって全力で修行してほしい。

一九八八年十一月十七日　富士山総本部において

◆第七話　苦しみを取り除くために

「転生を見すえた修行の土台」

◉魂の落下のプロセス

魂が落下していくプロセス、これが十二縁起の法である。

十二縁起のプロセスを簡単に説明すると、まず、真我が三グナに干渉される。ここで無智、あるいは無明という煩悩の最も根本的な働きによって、一部の魂はそこから落下する。そして本来自分に備わっているはずの絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜という三つの条件をかなぐり捨て、外的なものに対して、それよりももっと素晴らしいものがあるんじゃないかなといって、落下が始まる。

そして、その結果、名色が生起する。この名色とは何かというと、自と他の区

別である。そして、この自分と外界、対象に対して、その差異によって楽しみを求めるようになる。これが仏教的な言葉を使うならば愛である。そして、その楽しみを何度も何度も修習（しゅじゅう）するようになる。修習することによって貪りが生じる。そして、執着、つまり取著（しゅじゃく）が生じる。この取著が生じることによって、対象に対して、これは我がものであると、これはわたし自体のものである、よって、このわたしの得ようとしている対象を傷つけるものは何人たりとも許さないと。ここで嫌悪が生起する。そして、完全な形での分離が生じ、有、つまり、欲界・色界・無色界のどこかの世界へ転生し、そして、生が生じる。

未熟な魂はこの生を楽しむ。実際は楽しむということは正しくなくて、求め続けると言った方が正しい。おかしい、おかしい、わたしの求めている楽しみはいったいどこにあるんだと。これでもない、これでもないといって楽しみ続ける。そして、その背景にある、苦しみに少しずつ少しずつ気づくようになり、自分自身が楽しみだと思っていたものは、実際は苦しみだったんだということに気づくわけである。

◉苦から解脱へ

ここでのポイントは、この苦しみであるということを認識した後、真我が独存位に即帰れればいいんだが、その前の十二のプロセスが弊害となり悪戦苦闘が始まる。そしてまず、苦しみを取り除くために、今まで落下したプロセスの逆向きの道、つまり求める方向から引っ込める方向へと思索が始まる。

そして、ある人は仏教に、ある人は原始ヨーガへと傾倒していく。ここでしっかりしたグルにつくことができるならば、しっかりとした信が持て、そしてクンダリニーが覚醒する。クンダリニーが覚醒することによって、悦、つまりエクスタシーが生じる。このエクスタシーはわたしたちをこの現象界へと縛りつけている、例えば味覚による喜び、あるいは性的な喜びといったものよりも、強いエクスタシーを与える。よって、まず、この性的な喜びや、あるいは食物を食べることによって得られる喜びからの解放が始まる。

なぜ、ここで解放が始まるのかというと、わたしたちはこの性的な喜びや、あるいは食物による喜びを何度も何度も修習しているから、瞑想によるエクスタシー

がたとえ生じたとしても、その本当の価値と、それから自分たちが抱いてきた幻影の価値との比較、この比較が正確にできないわけである。

しかし修行が続き、クンダリニーが覚醒し、そのエクスタシーが頂点に達し、体が痺れるような最高の喜悦の状態が生じると、わたしたちは性的な喜びや、あるいは食物による喜びから解放される。

そして、このエクスタシーはわたしたちの心に大変なる喜び、しかもそれは実体のない喜びを提供する。普通、魂は対象を得たときに喜びが生起するが、その対象がない状態で喜びが生起するということは、もともとそれこそが、本当のわたしたちの求めていた一つの要件であったことに気づくからである。

つまり、外的対象による喜悦より、内的エネルギーが生み出す喜悦こそが真我の求めていた喜びだから、それによって本当の喜びは生起するわけである。そしてそれにより、いろいろなストレスから解放される。なぜならば、ストレスは対象と、それから魂との間によって生じる一つのギャップによって、ストレスが生じるわけである。

ということは対象なくして喜悦、喜びという二つの条件が備わった段階で、心身が大変軽快となる。そして、魂は対象に対していっさい心が動かないで、そして内側が充実した状態、楽を経験する。この状態に入ると、外的刺激に対して反応しなくなり、内側の世界の散策が始まる。これがサマディである。

そして、今までの自分の邪悪見解、あるいは謬見解（びゅうけんかい）に気づき、如実知見となる。如実知見となるがゆえに食欲や性欲だけではなく、いろんな要素に対して貪りを離れる。そして貪りを離れることにより、独存位の境地、つまり解脱が生じるわけである。

これが小乗仏教のすべてである。しかし、このような内容は講話で聴くべきものではない、本来は。本来はあなた方が自分たちの修行によって、あるいは記憶修習によって経験しなければならないものである。

オウム真理教の前身である、オウム神仙（しんせん）の会、そしてオウム真理教の初期の当時は、わたしが信徒の皆さんの修行の指導に当たり、そして多くの神秘的な体験をその場で与えていた。そして今年の三月から、例えばね、三月の超能力セミナー

あたりから、少しずつ以前と同じような皆さんに神秘的な体験を、まず、していただこうかなと考えています。

まず、手始めとしては超能力セミナー。この超能力セミナーに実際出て、この六時間の厳しい修行の間に、皆さんに真実の体験というものをね、していただきたいと。これは、わたしたちが苦から解脱へ至るための第一歩である。

◉真我を成長させるためのプロセス

では、この無明から始まり解脱に至るプロセスは、なぜ必要かというと、無智を取り払うためなのである。あるいは無明を取り払うためなのである。つまり、大いなる経験、そして経験によって、経験そのものが苦であるということを認識する、そして解脱するという、真我を成長させるためのプロセスなのである。

では、この解脱に至るプロセスは、どのようにしたら認識できるのかと。それは、まず、この現象の成り立ちについて、わたしたちは小さいときからいろいろな教えを受けている。しかし、そのような謬見解にとらわれるのではなく、本質

的な教えを繰り返し繰り返し記憶し、それにのって考えると。これが必要なのである。

では、基本的な考えとは何かというと、まず、わたしたちの身・口・意における善業を増大させ、そして悪業を滅することである。では、その根本となすものは何かというと、すべてを認めるということである。ではいったい何を認めるんだと。それはすべての魂の生存、すべての魂の安らぎ、そして、すべての魂の至福というものを認めるということである。そして十戒にしろ、あるいは三つの布施にしろ、そこがポイントになっている。

例えば、例を挙げてみよう。殺生、これは魂に大変な苦痛を与える。よって、なしてはならない。偸盗、これは盗まれた方にやはり大変な苦痛を与える。よってなしてはならない。邪淫、これは盗まれた異性の対象に対して大変な苦痛を与える。よってなしてはならない、となる。

しかし、いにしえの聖者方は単純にそう説かず、その時代、その時代の観念に合わせ、その時代の人が実践しやすいような風潮をつくったわけである。

もともと、この世は心がつくり出した幻影である。そして、この幻影を打ち砕くためには、以前わたしたちと同じように苦しみ、そして上流の流れ、つまり欲界・色界・無色界へと至る流れに乗り、最終の解脱を果たした多くの魂の道しるべを、一つ一つ確認しながら進む、ということが大切なのである。

◉叡智へと至る六つの道しるべ

では、その一つ一つの道しるべとは何かと。あるいは何を根本とすればいいのかと。それは、出家においては聖なる八支の道であり、在家においては六つの極限である。

ここで、六つの極限のメリットを少し話をしたい。六つの極限の第五番目。これは正サマディということになる。この正サマディの徹底は、わたしたちが布施の徹底から二正勤二正断の徹底に至るまでの実践を行ない、それを実際に究竟の瞑想によって理解するプロセスである。

究竟の瞑想とは何かというと――ここでいうね――無思考の状態に入り、そし

てわたしたちのバルドーがいったいどのような形成状態にあるのかと。要するに、それまでの布施の徹底ができているかと、あるいは持戒の徹底ができているかと、あるいは忍辱（にんにく）の徹底ができているかと、あるいはそれをチェックするための、精進の徹底はできているかということを見ること、これが第五番目の正サマディの徹底である。

例えば、例を挙げるならば、最終の解脱をすると、色界の光と、そして欲界の光、この二つの光が絶えず自分自身を包んでいる。そして黄色い光の色界の光が、例えば自分を包んでいる場合、「ああ、わたしは貪りのカルマがまだ強くて布施の心ができてないんだな」と、「もっと布施の徹底をやるべきである」と。あるいは情報の光が、例えば白い光であるならば、「わたしはヴァジラサットヴァの功徳は積んでいるが、まだヴァイローチャナには至っていないんだな」と。あるいは、この欲界や色界の光のバックに黒い光が存在すれば、「わたしの無明は、まだ完璧に止滅しているわけではないんだな」と。これが正サマディの徹底である。

そして、自分自身の修行をそれにより修正し、最終的には叡智の徹底ということになる。この叡智には二通りの意味合いがある。第一の意味合いは神秘的な力、これを有するということである。その基本は六神通、六つの神通ということになる。そして第二の叡智は、これは素晴らしい思索力。つまりすべての現象を見抜き、そしてそれを動かすということである。

◉六つの徹底の完成のために

では、この六つの徹底を完成するためには、何をなせばいいのだろうかと。それは四預流支（しよるし）の実践である。では、四預流支とは何かというと、まず三宝に対する帰依である。この三宝とは、まず覚醒者、真理、そして、真理に集う者に対する帰依となる。オウム真理教においてはグル、そして真理、そして教団ということになる。これが第一番目の預流支である。

この預流支という言葉の意味合いは、先程も述べた、欲界から色界、そして無色界をぶち抜き、最終の解脱をする流れに身を投じる、身を投じるための支え。

これが預流支である。

では第二の預流支とは何かというと、これは正記憶修習ということになる。つまり真理のデータをいかに多く根づかせるか。なぜならば、わたしたちは小さいときから正しくない見解をたくさん学んできている。それに対して、真理のデータを同じぐらい入れないと、正しくフェアに判定することはできないと。そういう意味で第二番目の預流支、これは正記憶修習ということになる。

では第三番目の預流支は何かと。これは、その正記憶修習したものにのっとり、わたしたちの身・口・意について熟考する。あるいは諸現象について熟考するということである。これによって教義の理解が深まり、そして苦蘊からの解放が始まる。

では第四の預流支は何かと。これは三で考えた身・口・意に対する熟考、諸現象に対する熟考を実際に実践するということである。

つまり、この四預流支とは、まず、何をなすかの規定をなす、これが第一番目の預流支であると。二番目は、その帰依をした、あるいは規定、この規定に対し

てしっかりと知識を根づかせると。三番目はその知識を十分に分析し、使いものにするようにすると。四番目は使いものになった、その思索レベルを実践段階に移行すると。

実はこれは、この現実の社会において生きる上においても大きな利益を与えてくれる考え方である。例えば、自分自身がどのような生き方をするのかと、ね。例えば、それは自由主義にしろ、あるいは共産主義にしろ、あるいは、その自由主義でも共産主義でもない政治的な考え方にしろ、まず、その根本的な土台となる本、あるいは人に対して傾倒すると。

二番目はその人の政策、これを何度も何度も読むと。三番目はそれを自分の生活に当てはめてみると。四番目は実践すると。それをなすならば、例えば日本にいても共産主義の実践ができるし、あるいはアメリカにいても共産主義の実践ができるし、あるいはソビエトにいても自由主義の実践ができるということになる。

そして、いかなる邪悪な空間にあったとしても、この四預流支を繰り返し、繰り返し実践するならば、わたしたちは真理から外れることなく、必ずや上流に至

り、アカニシタ天、つまり色究竟天（しきくきょうてん）へと転生し、マハー・ニルヴァーナへと入るのである。

◉堅固な修行の土台を

ところで、オウム真理教は一九九一年に入り、ベクトルが下降から上昇、つまり発展の方向へと向かい出した。これはひとえに、一生懸命マスコミや権力がオウム真理教を叩いていて、その叩かれている間に、わたしの出家した弟子たち、あるいは信徒の皆さんが一生懸命、教学、瞑想といった修行の土台を固めていた結果にほかならない。

これはちょうど次の比喩（ひゆ）にたとえることができる。ここに二本の杭（くい）を考えてみよう。一本目は十メーターの杭、二本目は六メーターの杭と。一本目の杭を五メーター打ち込むと。二本目の杭を一メーター打ち込むと。ね。そしてこの杭の大きさを同じだとしようと。わたしたちが視覚的に見ることのできる長さは五メーターであり、杭の大きさは同じである。

しかし、この杭に対して横から力を加えた場合、十メーターの杭は安定し、なかなかもぎ取れるということはないであろう。ところが第二番目の六メーターの杭は案外あっさりともぎ取ることができるであろうと。これは何を意味しているかというと、記憶、そして記憶修習の違いを意味しているのである。

わたしたちが、この人間の生、そして死、そして中間状態、これを正確に正しく生きるためには、それほど深く真理を根づかせなければならないということなのである。そして、これだけ深く真理を根づかせるならば、いかなる魔の軍勢に攻め込まれたとしても、平然とそれをはねのけ、最高の至福、最高の歓喜、最高の自由を得ることができるはずである。

一九九一年二月十七日　新東京本部において

◆第八話　サキャ神賢、初転法輪の地において

「四諦八正道と縁起の法」

◉真理勝者から真理勝者へ——受け継がれる法の輪

これから七十八億年後のこのヴァーラーナシーは、この様相とはまたかなり変わって、もっと近代的、そしてそれでいて華麗、そして寂静といった三つの要素を備えている土地となるであろう。

もともとこの場所は、偉大なる真理勝者であられる、また十力者であられるサキャ神賢が、初転法輪を転じられたところである。その初転法輪の内容とは何かというと、苦、苦の生起、苦の滅尽、苦の超越に至る八段階の道と。それと、十二縁起の法をお説きになったところである。もともとこの地には、偉大なる真理

勝者方がよくいらっしゃり、そして法をお説きになった。例えば、ヴィパッシー真理勝者がそうであり、そしてカッサパ真理勝者がそうであり、先程述べたサキャ神賢真理勝者がそうであると。そして、これから七十八億という未来際に、マイトレーヤ真理勝者が、ここで同じように法輪を転じるであろう。

で、なぜその法輪を転じることができるのであろうかと。それは、ここに一筋のデータ、つまり真理を説き明かすためのデータが存在しているからである。では、なぜそれを、今説き明かしてはいけないのかと。それは、現代のわたしたちが、例えばその法を聴いたとしても、それについて理解することはできたとしても、それを体感する、体得するに至らないからである。

例えば、それはちょうど、絵のかき方をいくら学んでも、それを自在にかくようになるためには時がかかるのと同じように、わたしたちが今ここで法を聴いて、それを記憶修習したとしても、その法が完全に根づくまではそれだけ長きにわたる時が必要なのである。

そして、おそらくここにいらっしゃっているほとんどの人は、前生においても

この地を一度や二度は訪れたことがあるだろうし、それから未来際においても何度となくこの地を訪れ、そしてより真理に対する確信を深め、輪廻転生を続け、七十八億という長きにわたる時の後、ここで初転法輪を聴き、そして煩悩破壊していくであろう。それほど多くの時が必要なのである。

◉苦しみを知り、苦しみの生起を知り、苦しみの滅尽・破壊を知る

まず、ここで説かれる原則的な法とは何かというと、この諸現象、わたしたちが生活している一切の現象は楽しみの裏に必ず苦しみが隠されていると。

それはちょうど、ここにドブがあったとして、そのドブの水をすくうと。確かにこのドブの水の中には、魚の餌となるプランクトンも存在してるだろうが、それと同じように多くの科学物質その他が存在していて、わたしたちの体を害すると。これと同じようなものである。あるいは、例えばわたしたちは食事を取ると。その食事の一部は栄養となるが、一部は糞尿となるというのと同じであると。

つまり、この現象界における楽しみの裏側には必ず苦しみが隠されているので

ある。これが、第一の真理における原則である。

第二は、それに対してわたしたちが求めようとすれば、必ずその苦しみ、隠されている苦しみというものが生起するのだということである。

例えば、この世の中に対して淡々ととらわれることなく生きるとするならば、その楽もわたしたちには強くアプローチしてこない代わりに、苦しみもアプローチしてこないと。そして、その楽というものも必ず苦しみに変化するわけだから、結局苦しみから出離することになる。つまり、わたしたちがこの現象の世界に強く縛りつけられれば縛りつけられるほど、苦しみというものは生起する、起き上がるのであるということである。

これは例えば、金を儲けたいと考えたり、事業を成功させたいと考えたりするのも同じである。淡々と自分自身の目の前にある事象に対して集中し続けていれば、勝手に成功するし、勝手に金は集まると。あるいは、例えば偉大な作家になろうと考えるのも同じである。いい作品を書こうとせず、自分のベストの限りを尽くそうと考え、筆を執れば、そこには当然成功というものが生じてくる。

しかし、人間はそう思わない。つまり、例えばいろいろなイメージを膨らませながら、あるいはいろいろな思索をしながら、あれやこれやとやりながら、結局そこでエネルギーをロスし、事業を失敗したり、あるいは経済的損失に陥ったり、あるいはいい文章が書けず、結局作家生命を断念しなければならないというようなことになってくると。

第三番目の苦しみの滅尽、苦しみの破壊と。これは何であろうかと。それについては、まず現象を正確に見つめると。そしてその裏側に、現象の裏側はすべて苦しみであるということを認識すると。そして、この認識した結果というものを正確にとらえ、そしてその原因を探り、その原因を取り除く作業を行なうと。これこそが苦しみを破壊する、滅尽する方法なのである。

例えば、過ちによって結婚したと。その妻や、あるいはご主人が自分にとって不幸をもたらすタイプのものであったとしたら、それはさっさと別れればいい。もちろん、大乗の修行、あるいはヴァジラヤーナの修行によって、その人を変えて真理を実践させようと、そしてその人を幸福にしてあげようという心を持つな

らば、それはもっとより崇高な心の働きとはなるが、それはなかなか大変である。

このように原因をスパッと見つめ、そしてそれに対して対処すると。これが苦しみの破壊、滅尽であると。

◉高い世界へ至るための準備

では、その苦しみを超越するためにはどのような方法があるのかと。それは、聖なる八段階の実践であると。まず正見解。これは、教義をできるだけたくさん学び、そしてものを考えるときの土台を固めると。

ヨーガ派と仏教の違いはここにある。ヨーガ派というものは、自分の考えというものを重んじる。よって、ズレることがあるし、魔境に落ちることも多いと。

しかし、仏教というのはもともと過去の仏陀、その過去の過去の仏陀等がお説きになった偉大なる教えというものが存在している。その教えをまずしっかりと記憶すると。その記憶することによって、次の正しい思索、思索ができるようになると。

つまり、どのように考えたらいいのか。これはちょうど、正確な図面をまず記憶し、その図面にのっとって何かを作り上げるというのと似ている。確かに試行錯誤することによって作り上げたものは、その努力というプロセスにおいて価値は存在するかもしれない。しかし、でき上がったものがベストであるかどうかは別問題である。

もし、最高の図面、今まで多くの人たちが練り上げた図面というものがそこに存在するとするならば、それを使って作り上げた方がよりいいものができるはずなのである。よって、正見解を第一とし、そして第二番目に、それに基づいて正思惟すると。

そして、この正思惟においては、愛著（あいじゃく）・邪悪心・迷妄といった三つの要素をできるだけ減少させることに努め、慈愛・聖哀れみ・聖称賛・聖無頓着といった四つの要素を培うと。これを日々修習しながら、第三段階の正語の実践に入っていくと。

なぜね、この正見解、正思惟、正語といったプロセスに入らなければならない

のかと。これは、高い世界の神々は、綺麗な言葉をお使いになり、綺麗な心をお持ちになっているということを考えたら、わたしたちが綺麗な言葉を使い、綺麗な心を日々修習する瞑想が、あるいは実践が何を意味するか理解できるはずである。つまり、高い世界の神々の心に心を合わせるだけではなくて、自分たちがその世界へ至るための準備をするわけである。

この正語においては、妄語・綺語・悪口・両舌という四つの口のカルマを捨断（しゃだん）し、そして先程述べた四つの無量心にのっとった言葉を語ると、ね。

◉エゴからくる行為の捨断

そして、第四番目の正行為へと入っていく。この正行為は、わたしたちがエゴのために行動しているこの行動を捨断するということが狙いとなる。

つまり、生き物に対して哀れみを持ち、殺生しない、痛めつけないと。生き物に対して、その生き物の喜びの対象を盗むのではなく、施すと。生き物に対して、相手の嫌がるような、邪悪な心を持った性的交わりをなさないと。これらの三つ

の、殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れることからスタートし、そして、本当に親切な、融和的な態度で接すると。これが、第四番目の正行為ということになる。

これは、例えば会社に勤めている人などは、前者と後者が自分にどういう結果を招くかよく理解できるはずである。あるいは家庭生活においても同じである。絶えず優しい態度、親切な態度で接するならば、当然信用というものは増大し、あるいは家庭生活というものは当然柔らかく、そして平和なものになるはずである。

◉一つ一つをクリアして

第五番目の正生活。この正生活は、在家は在家のなさなければならない実践、これをなすと。

一つ気づいたかもしれないが、これは順番である、あくまでも。もう正生活の、第五番目に入るときには、当然四つの段階をクリアしていなければならない。そ

して、生活全体を真理修行に徐々に徐々に傾けていくと。例えば在家の場合、在家の実践である七つの方法とか、出家の場合、例えば七覚支の実践とかいうことが課題になってこよう。

そして正精進、正奮闘精進ということになるが、これは、今自分のできない事柄に対してよりいっそう努力しようとする、奮闘しようとする修行である。

例えば、わたしはこういう悪業があって、例えばわたしはタバコをやめられないのよと。これを奮闘する、闘うと。ということは、闘うまでの段階で、少なくとも正見解、正思惟、正語、正行為、正生活という五つは、ある程度できてないと闘うことはできないわけである。

で、六番目によって完全に悪法を断じ、善法を増大させて、そして正記憶修習述と入っていくと。この正記憶修習述は何かというと、より諸現象の実態を正確につかまえるということである。それは先程述べた、例えば四念処（しねんじょ）がそうであり、あるいは天界に対する思念や、人間界に対する思念や、あるいは解脱に対する思念がそうであると。

◉正サマディから正離解脱へ

これらの天界に対する思念、あるいは解脱に対する思念、あるいはこの身体に対する思念、あるいは感覚に対する思念、心の働きに対する思念、あるいは諸現象における法則に対する思念、これを修習することにより、その世界を経験すると。これが、その次のサマディである。正定である。

で、日本の仏教はこの八正道までしか説かないが、実際はその先は当然存在する。なぜかというと、サマディは結果ではないのである。これは入り口なのである。つまり、サマディによって如実に経験するのである。これはまあ、正精通という言葉を使っているわけだけどね、パーリ語では。ここによって、すべての世界、すべての原則の真の意味を理解し、そしてその原則から離解脱すると。

◉無明から始まる苦しみの生

この四諦八正道をまず、必ず真理勝者はお説きになる。そして、次に縁起の法をお説きになる。

まず、わたしたちがこの生を終えた後、わたしたちは無明へと没入すると。無明とは何かというと、闇である。完全なる暗闇である。なぜここで暗闇が強調されるかというと、もし光が存在していれば、わたしたちはこのような苦しみ多き人間の世界へ転生しないのである。もっともっと楽だけの世界がたくさん存在しているし、そこへ転生した方が当然幸福なのである。しかし、わたしたちは盲目なるがゆえに、暗闇と共存してるがゆえに、この人間の世界へ転生するのである。

では、これはどのような世界へ転生するのかと。それは、次にくる経験の蓄積、これを因として転生するのである。例えば、怒り、あるいは憎しみだけを修習している人は、その憎しみ多き世界へと転生する。例えば、人にものを施さず、貪っている人は貪り多き世界へ転生すると。例えば、性欲の修習だけを行なっている人は、その性欲の世界へと転生すると。もちろん、これは先程述べたドブの川と同じように、そこでは喜びもあるが、苦しみも当然存在していると。これが行なのである。

そして、そのいろいろな経験の中で、次は識別が生じてくると。これは先程述

べたいろいろな経験から、例えば貪りが優位になるのか、あるいは愛著が優位になるのか、あるいは嫌悪が優位になるのか、邪悪心が優位になるのか、あるいは他の付属的な煩悩が優位になるのかによって、形成される肉体は違ってくるわけである。これは、この次の名色という段階になる。

ここでわたしたちは、アストラル・ボディーを形成する。そして、それには六処という、当然感覚器官が内在する。これは瞑想が進んでくると、この肉体と同じように、あるいはそれ以上に強い感覚器官が、わたしたちの内側に存在してるんだということが認識できる。この六処がそのアストラル世界と接するうちに感覚が生じ、そしてそれぞれの経験に応じて、粗雑な身体をつくる前段階である、世界の移行が生じてくる。

例えば、あるものは形状界へとどまり、あるものは欲界の低位にとどまるわけである。そして、この形状界にとどまるものは、そこで煩悩が少ないがゆえに、例えば何カルパとか、例えばそうだね、六カルパだとしたならば、それは約六百億年ぐらいだと考えたらいいわけだけど、六カルパとか、あるいは十カルパとか

五百カルパとか、長きにわたってそこで生存することになる。

ところが、よりいっそう粗雑なものを経験しようとするならば、そこから渇愛が生じてくる。つまり、この経験できない身体じゃ嫌だと。微細な身体じゃ嫌だと。もっと具体的に経験をしたいと。そして実際に、低位アストラルにおいてその経験が始まる。その経験が始まり出すと、そのときにわたしたちはとらわれが生じ、そして、そこで子宮へと転生するのである。これが、渇愛、取、有なのである。そして生存すると。いいですか。

生存することによって、わたしたちはそこで苦楽を経験し、老死を経験し、そして病を経験し、愁・悲・苦・憂・悩という心の苦しみを経験すると。

◉そして、遠離・離貪・解脱へ

ところが、高い世界の記憶が残っている魂はそこで修行を始める。修行を始めることによって、まずクンダリニーを覚醒すると。クンダリニーを覚醒することによって、悦が生じ、悦が生じることによってこの欲界の快楽より悦の方がいい

んだと思うようになる。そしてその悦は、心に喜びを形成すると。これは実際は、喜びというよりも明るさといった方が正しいとわたしは思います、経験からいうとね。で、明るさが生じてくると、身体が大変軽快になると。

そして、完全なる意識の拡大、楽を経験すると。そのときサマディに入り、先程述べた正精通、つまり如実知見に入り、そしてこの諸現象一切がわたしたちにとっては苦しみなんだということを理解し、遠離し、離貪し、そして解脱するのである。

これらの法則はおそらく、今、在家の皆さんは聞いても、ある人はある程度わかり、ある人は少しわかり、ある人は全くわからないかもしれない。法とはそういうものである。よって、基本的なね、教学、これを徹底的に固めてください。それによって皆さんは、今日の説法の内容がより深く理解できるはずである。いいですか。

一九九一年十月八日　インド・サールナートにおいて

◆第九話　しっかりと智慧を持って現象を見る

「十二縁起の法のすべて」

◉非神秘力（無明）

今日は、君たちが最もよく知っている十二縁起の法を説き明かそうと考えている。まず、わたしたちは、大完全煩悩破壊する前は、完全な無明の状態である。この無明の状態とは何かというと、経験にとらわれている状態、経験によって錯覚を起こしている状態ということになる。

例えば、ここにある人がいたとして、その人が恋をしたとしよう。いいかな。そうすると、その恋を始めたときと、例えば恋が中程度になったときと、恋が終わりに近づいたときと、これでは、その対象に対する認識の仕方が変わってくる。

もちろん、この認識の仕方というものは、対象も変化しているわけだから、その変化に伴って変わるといえばそうかもしれないが、実際はそうではない。

例えば、短い期間において恋をしたと。初めは、ああいいなと思ったのが、徐々に徐々に美しくなっていったとしよう。そして、何をとっても素晴らしく見えるようになっていくと。ね。これは、最も恋が燃え盛っている状態であると。そして、その恋の炎が燃え盛っていて、それから徐々に徐々に冷めていく段階で、その人の、一つずつ欠点を捜し出すようになる。これは、心の特性だよ。で、欠点を捜し出し、あの欠点もある、この欠点もある、その欠点もあるというふうに認識するようになる。そして、そのうちに、その対象の魅力というものを認識しなくなる。わかるかな、これは。これは何かというと、要するに無明、つまり経験によってすべてを見ているからであると。ね。

わたしたちが死んだ後、まず何が起きるかというと、死後の気絶が起きます。これはOKかな。死後気絶イコール根本無明だと考えてください。つまり、前生のカルマが完全に終わりを告げ——というのは、今この生があるのは、ほとんど

は前生の因によってあるわけだよね。これはOKだよね――で、その前生の因が完全に終わりを告げた状態。そしてデータだけ、今生のデータだけが蓄積されている状態。その今生のデータの蓄積というのは何を意味するかというと、先程言った経験の集積であると。いいかな。

そうすると、その状態でいったんデータは切れますから、完全に無明の状態に入ります。ね。これを、無明を非神秘力といっているのは、そこにあるんだね。それは、もし神秘力、実体を正確に、ありのままに見つめる力があるとするならば、そうならないわけです、本来は。わかるよね、言ってることは。それは、どういうことかというと、今生培った傾向と前生培った傾向との差があまりにもあるがために、その意識に断層が起きるんです。わかるかな。

◉経験の構成（行）、識別（識）

それによって、次は経験の構成要因が生起します。例えば、どういうことかというと、ね、食い物に対してのとらわれとか、あるいは貪りの感情とか、あるい

は性的快楽に対するとらわれとか、あるいは家庭の情に対するとらわれとか、ね、あるいは嫉妬に対するとらわれとか、あるいは知謀に対するとらわれとか、あるいは満足に対するとらわれとか、いろんなものが、その生で培った、つまり死ぬ前の生で培ったデータが生起します。これが行の状態です。ね。

それによって、次は識別が生起します。どういう識別が生起するのかというと、わたしはこれは好む、これは好まない、ね、わたしはこういう方がいいんだ、あるいはこういう方は悪いんだという識別が次は生起します。いいかな。

◉心の要素-形状-容姿（名色）

識別が生起するがゆえに、次にアストラルでその形を形成します。それは、例えば君たちがこの現象界で満足できない場合、食欲や性欲をアストラルで経験するのと同じです。この状態、この状態が名色の状態です。

そして、この名色の状態によって、いいですか、五蘊が生起します。完全な五蘊がね。肉体、そして感覚、イメージ、それから意志、そして識別だね。この五

蘊が生起します。五蘊が完全に生起することによって――まあここでいう五蘊というのは、最後の意識だけは前回のものだけど――その意識、識別、名色によって、もう次の傾向ができるのがわかるよね。つまり、材料が違うわけだから。みんなが錯覚を起こすのはそこなんだよ。

つまり、材料とは何かというと、その人の身における善業、口における善業、あるいは心における善業、身における悪業、あるいは口における悪業、あるいは心における悪業というのが、一つ一つ形成されていくわけでしょ。それがデータとして残っているわけだよね。わかるよね。

それが無明から、今度は、その経験のデータの生起の段階で、バッと現われるからね、次の生のデータが。それによって、識別が生じてくるわけでしょ。これはよし、これはあしと。わかるよね。で、その次に、その識別によって、今度は五蘊ができてくるわけでしょ。わかるよね、これは。

例えば、どういうことができるかというと、例えば、貪りの心が強ければ、当然胃袋が大きくなるとか、あるいは性的なものを欲していれば、当然性器が大き

くなるとか、あるいは、そうだね、水の中が好きであれば、当然、まあそういう魚、泳ぎやすいような形になるとか。そういう形の形状がアストラルに現われてくるよね。OKだね、これは。

◉アストラルの下位の世界へ

で、その次に、それを土台として、しっかりとした五蘊が形成されるよね。これはOKだね、ここは。どうだ。で、その経験されるがために、次は何が起きるかというと、アストラルの中位から、そして下位へと移行していくと。移行していく段階で、自己の欲望の対象の世界とそこで接触するわけだね。わかるね。

例えば、慢の場合は、そういう慢を与えてくれる空間に身を置いて経験を始めると。いいかな。あるいは、例えば闘争の場合は、闘争のある空間に身を置いて経験を始めると。あるいは、情の場合は、情の空間に身を置いて経験を始めると。あるいは、餓鬼の場合は、先程言った貪れる状況において経験を始めると。あるいは、動物の場合は、ね、先程言ったとおり、楽しみを求めて経験を始めると。

まあ、地獄の場合は、対象に対して攻撃を始めるということによって経験を始めるという形になる。こういう形成が起きてくるわけだね。これはＯＫかな。これが要するに、六処、触、受の段階だね。

それによって、当然感覚が生起してくるでしょ。接触を始めることによって。どうかな。これは、肉体の感覚、それから視覚、聴覚、嗅覚、味覚、ね、まあ最後に言った触覚、それと、それとは別に、今度は意識の経験、つまり心の経験があるよね。どうですか。これを受といっているわけだね。

で、その経験の中で、これは楽しい、これは楽しくないという、次は二段階に分かれるよね。どうかな、これは。だよね。で、一回楽しんだら、もう一回楽しみたくなると。どうかな。二回、三回、四回と、どんどんとらわれていくと。これが愛から愛著の状態なんだね。愛、愛著。つまり、取著、愛著の状態なわけだ。

で、当然、その認識の中に愛著が生起するから、もう一方では強烈な嫌悪が生起します。わかるよね、言ってることは。つまり、偏った心の状態が形成されるわけだから、もう一方では、当然、苦しみの、ね、あるいは嫌な感情が生起する

ことになります。でしょ。例えば、それはどういうことかというと、冷たさを好むとするならば、当然熱さを憎むと。でしょ。あるいは、柔らかいものを好むとするならば、当然固いものを憎む。でしょ。わかるよね。あるいは、甘いものを好むとするならば、当然苦いものを憎むと。でしょ。こういう形で二極化されます。

◉苦しみの愛欲界へ

そして、そのとらわれによって、その世界へと生を受けるわけです。ということは、もう、この前の段階で、つまり苦しみと喜びという二極の心の状態を経験し、二極の心の状態で転生しているから、その世界は当然二極の世界である。つまり、苦しみと楽しみの二極が現わされていくことになります。わかるかな。これが、十二縁起の法のすべてです。

はい、ではここまで質問を取りましょう。

【質疑応答】

◉色――形状-容姿

（質問者A）下位アストラルに来たときに、まあしっかりとした五蘊が形成されるというふうになると思うんですが、そのしっかりとした五蘊の中の一番最初の色に関してのことが、ちょっとわたしよくわからないんですね。色っていうのは、形状-容姿の形状…。

（尊師）形状-容姿は、君たちが、例えばアストラルで食べたり飲んだりするよね。経験してるよね。それを言ってるんだね。

（質問者A）具体的なイメージっていうふうな感じで…。

（尊師）イメージではないね、あのときは。自分で実際に経験してるよね。

（質問者A）あ、そうか。はい、わかりました。ありがとうございました。

（尊師）はい。

他にないかな。

◉マハー・ムドラーの成就の素晴らしさ

（質問者B） 申し訳ないんですけど、かなり難しいところがあるんですが、前の生とは材料が違うというのは、前の生は、その前の生の意識状態から五蘊がバーッと形成されてきて、そして、まあ要するに、この段階では、その前の前の生じゃなくて、その前の生、死ぬ前の生の経験で、こう五蘊がバーッと形成されたからということですよね。

（尊師） そうです。

それから一つだけね、ここで付加しておかなきゃなんないのは、マハー・ムドラーの成就というのは、わたしは何が素晴らしいかというと、その人の前生の、つまり一つ前の生の経験がすべて現われてくるんだよ。だから――あ、もう申し訳ない――正確な言い方をするならば、成就の段階でその生が終わるんだね。その生というのは、その生まれてくる前の生が終わるんです。そして、成就後は何が起きるかというと、今度は生きてきた過程における経験が、すべて生起して止滅していくんです。

だから、例えば仏典の中で、アングリマーラが成就した後に托鉢をしていると、いろんなものを投げつけられたり、ね、あるいは罵倒されたりするわけだよね。

なぜ、マハー・ムドラーの成就者が、そういう、物を投げつけられたり、罵倒されたりするのかと。でしょ。それは簡単であると。それは、先程言ったとおり、その人が大いなる殺生をしたからであると。で、その殺生をその生で経験し終わればね——その生でその人がその生の経験をし終わるということは、どうなりますか。その人には何の経験が残りますか。次は、神聖行の経験しか残らなくなるよね、成就した後の。でしょ。つまり、成就した後の神聖行の経験しか残らないということは、その人はどの世界へ転生しますか。

（サマナ）神聖天。

ね。神聖天以上ということになるよね。ということなんだよ。だから、マハー・ムドラーまで何としてもわたしは成就させたいと考えているのは、そこなんだね。

◉シャクティーパットの果報

じゃあ次に、オウム真理教のもう一つの、ね、法体系であるシャクティーパットと。このシャクティーパットは、じゃあどういう利益を、そのシャクティーパットをなしている人に与えるのかと。ね。これは、ものすごく広大、無辺、そして無量の果報を与えます。

なぜかというと、いいかな、この世というのは、縁起の法で成立しているよね。どうかな。ということは、その人が例えば、もう絶対に真理と縁のないような人にエンパワーメントを与えると。エンパワーメントを与えることによって、その人が真理と縁ができると。ね。真理と縁ができることによって、自分のデータがけがれて、いったん真理と縁が遠のくと。あるいは、煩悩が生起すると。これはOKかな。

じゃあ、この煩悩が生起する、あるいは真理の縁が一回途絶えたとして、それを当然グルはいろんな形で落としてくれるだろう、最終的に。どうかな、それは。そうすると、残るのは何が残るんだろうかと。多くの人を上向させたカルマしか

残らないよね。

　ということは、その人が次、例えばどの世界へ生まれ変わったとしても、また上向させるグルに巡り合うことができるんだ。これが、シャクティーパットの果報なんだね。当然、そのとき、ね、多くの人の苦しみを経験し、苦しみを受ける。苦しみを経験し、苦しみを受けるということは、その人は損失を被ったかのように見える。しかし、実際はそうじゃないわけだよね。大いなる利益を与えてもらったとことになるわけだ。わかるかな、言ってることは。

◉一番初めに落ちたときの経験

（質問者C）先程の十二縁起のところで質問なんですが、まあ、各生死んだ後にですね、そこの無明からなる経験をするといたしまして、一番初めに落っこちたときも、それと同じ経験というか、要するにマハー・ニルヴァーナから落っこちたときの経験と同じ経験を各生においてするという解釈になるわけでしょうか。

（尊師）いや、マハー・ニルヴァーナから落っこちるよね。落っこちた初めは、

例えば…。

（質問者C） 前生におけるカルマというのはありませんですよね。

（尊師） まず、何が生起するかというと、前生というか、その入る前の経験でしょ。

（質問者C） マハー・ニルヴァーナに入る前の経験。

（尊師） マハー・ニルヴァーナへ入る前の経験が生起するわけだから、どういうことかというと、例えばゆっくり落ちていくんです、魂は。だから、何ていうかな、例えば人間界が形成されていくときに、人間の寿命は無限であったとかいうことになるわけ。どういうことかというと、例えばマハー・ニルヴァーナまで入っているとするならば、その魂は当然多くのヒナヤーナの修行、多くのマハーヤーナの修行を経験しているよね。多くの、あるいはタントラ・ヴァジラヤーナの修行を経験しているよね。これはどうかな。

（質問者C） そう思います。

（尊師） ということは、タントラ・ヴァジラヤーナの、例えば経験、まあ例えば色界に長くとどまると。あるいは無色界の空無辺境に長くとどまるとか、あるい

は識別無辺境に長くとどまるとか、あるいは無所有境に長くとどまるとか、あるいは非認知非非認知境に長くとどまると。こういうプロセスを当然経験してるはずだよね。例えば、非認知非非認知境といったら、もう無限だからね。マハー・ニルヴァーナから、次は、非認知非非認知境に無限にとどまると。無限というのは、ここでいう無限というのは、要するに数字が発散しているというふうにとらえることができる。わかるよね。

（質問者C）はい、表現できない…。

（尊師）わかるよな。数字が発散というのは、8を横にしたような字。これは、発散というんです。発散でいいのかな。

（マンジュシュリー・ミトラ正悟師）はい。

（尊師）つまり、数字が計算できない状態。いい状態だね。で、そこへ無制限にとどまった後、次は無所有境にやはり同じように発散する年数とどまると。で、識別無辺境に発散するぐらいの年数とどまると。で、次に空無辺境に発散するぐらいとどまると。でまあ、その次の色究竟天にとどまる年数というのは、まあい

ろいろあるけども、例えば、ね、十万カルパとか、そんなもんとどまるという形で、徐々に計算できる数字の年数とどまっていくわけだね。

◉輪廻を繰り返すと早く転生する？

（質問者C） そうしますと、輪廻を繰り返すうちに、無明から生に至る、このプロセスですけども、この期間がどんどん短くなって、どんどん何ていうか、早く転生する…。

（尊師） それは、そうだよね。なぜかというと、例えば凡夫はだよ、心に殺生をなすと。それから、行為に殺生をなすと。ね。心に殺生をなすというのは、あいつを殺してやりたいと。例えば、あの虫は嫌だから死んでしまえと。で、実際に、その行為に出ると。でしょ。

そうすると、その殺した相手の意識の遮断、つまり気絶状態というのは、その人の経験に根づくよね——これは、前回、信徒に対して説法した中に入っているわけだけど——それはわかるよね。初めは、その回数が少ないよね。少ないから、

意識の断絶が少ないよね。これはＯＫでしょ。ところが、徐々に徐々にそれが多くなっていくよね。一回、二回、三回、四回と。でしょ。そうすると当然、その生は短くなるよね。つまり、何かのショックがあれば、即気絶すると。イコール死であると。でしょ。そういう形で寿命が短くなっていくんですよ。

だから逆に、今度は、例えばティローパがなしたようなポア。例えば、魚とかをね、意図的にポアさせると。これは、何を与えるかというと、その意識に対して断絶のない意識状態を経験させるわけだね。じゃあ、断絶のない意識を経験させることによって何が起きるか。どうかな。その人は当然、データとして断絶のない意識状態をコーザルに一つ経験するよね。どうかな。ということなんだよ。断絶のない意識状態を経験することによって、その人は徐々に徐々に意識がつながってくると。連続してくるということなんだね。それによって、長寿を得るようになるわけだ。いいかな、ここは。

他にないか、質問は。

◉断絶のない意識状態と寿命

（質問者B） まず、ポアによって断絶のない意識状態に到達するという理由は何でしょうか。

（尊師） いや、それは、自分の心を使って、相手に意識を移し変えることによって断絶をさせないわけでしょ。だよね。つまり、意識の断絶があるのは、経験が次の経験に至るプロセスの途上で、経験と経験のギャップによって断絶するわけでしょ。その経験と経験によって断絶する部分を、要するにそのポアをする人がお手伝いするわけだから、断絶は起きないよね。それは、無明じゃなくて、いきなり例えば名色ぐらいから展開したら起きないよね。

（質問者B） で、もう一つ、寿命との関係がどうもよくわからないんですけど。

（尊師） ん、つまり意識の断絶を何度も何度も経験するよね。例えば、Mがカエルを殺したと。そうすると、カエルが死んだことによって、その死んだカエルの意識の断絶のデータ、死後ショックのデータが入ってくるでしょ。わかる？ 一、二、三、四、ズーッとたくさん入ってくるよね。そうすると、どういうことが起

きるかというと、そのある条件がくるとそういうデータが生起する。でしょ。データが存在するから生起するんだよね。そのときに、例えばその条件を満たしていれば、死が訪れるよね。じゃないかな。

（質問者B）それは要するに、殺したから、要するに命が短くなるという、カルマが返ってくるということをもう少し具体的に言われたわけですか。

（尊師）そうです。殺したからカルマが返ってくるんではなくて、殺したことによって、相手の苦しみとか、あるいは死後ショック、気絶の状態はだれに入るかというと、殺した人に入るわけだよね。これはOKだよね。それが、例えば動物の場合は柔らかいと。それから、人間の場合はそれが重たいと。神々の場合はもっと重たいと。これもOKだね。でしょ。

（質問者B）だから、上の者をあやめた場合の方が、より大きな死後ショックとか…。

（尊師）そうです、そういうことです。で、そのデータが蓄積されるとするとどうなるかというと、そこにまず環境がそろって、そしてそのデータが生起するよ

うになるよね。データというのは、そういうものだから。

（質問者B）ということは、死後ショックを自分も受けやすい状態になる…。

（尊師）そうです、そのとおりです。だから、サキャ神賢は、ヒナヤーナにおいては、十戒をまず提示して、そして不殺生の戒によって意識の連続性を図れという指示をなさったわけだね。

◉意識がなくても経験する？

（質問者B）あと、もう一度ちょっと前に戻るんですが、五蘊が生起するというところで、それと絡めて、その前の段階で上位アストラル、下位と移行していって、下位で色の形成が完全になされるということなんですけど、その上位、下位と移行していくのは、すべての魂が転生のときに上位、下位と、そのときに意識があろうとなかろうと経験するというか、通過する…。

（尊師）だから例えば、その前の生で、上位アストラルの経験というか、そういう条件が全くなければ、そこでの経験はあっという間にすぎてしまうね。瞬間だ

よね。

（質問者B）一応、移動はするんですか。

（尊師）移動はするんです。

（質問者B）で、ここで言われている肉体というのは、あの…。

（尊師）変化身のことだよ。

（質問者B）変化身。

（尊師）だから、報身とか、変化身とかのことだよね。

（質問者B）で、縁起の法でいう、取著の後の有や生とかいう部分の生というのが現象界のことを意味するんでしょうか。

（尊師）そうです。

◉前生のカルマが影響を及ぼさなくなる理由

（質問者D）基本的なことになってしまうんですが、前生のカルマがなぜ影響を及ぼさなくなるのか、その原理についてもう一度…。

（尊師）ん、どういうことかな。

（質問者D）死んだときに、今生ではなく前生のカルマが影響を及ぼさなくなるということについて…。

（尊師）それは、ちょうどこのように考えたらいいと思う。ここに鍋ものがあるとしようじゃないか。ね。これをおでんだとしましょう。いいかな。卵があって、そして、まあチクワがあって、それからカマボコがあって、ハンペンがあって、で、あとは野菜が入っているとしましょう。いいね。いいですか。で、まず卵を食べたと。チクワを食べたと。カマボコを食べたと。ハンペンを食べたと。野菜を食べたとしましょう。ね。スープだけが残ったとしましょう。そうすると、これはおでんといえるかどうかなんだ、このスープだけで。

（質問者D）いえないと思います。

（尊師）いえないよね。つまり、このいえなくなった段階で死が起きるんです。だから、次の生にこのスープの分のカルマは移行します。これが、まだ一生で切れないカルマといわれるやつなんだ、例えば。わかるよね。ということなんだよ。

つまり、その果報を経験し終わった段階で、次の生が決定されるわけだよ。

それは、例えばどういうことかというと、例えばここに卵を食べたと、ね、それからチクワを食べたと、それからカマボコを食べたと、ハンペンを食べたと、野菜を食べたとしましょう。ね。スープが若干残ってたとしましょう、ね。

そうすると、その人は何を形成したかというと、食べたことによって糞尿が形成されます。いいかな、それは。そうすると、その人の次に持っているものというのは何かというと、糞尿とスープなんです。わかるか、それは。ということは、次の生の形成要因は、糞尿とスープということになるんだよ。だから、それを今度はもとに、次の生が形成されるわけです。

◉マハー・ムドラーの成就——前生のカルマをすべて切った状態

ところが、マハー・ムドラーの成就というのは、その前生のカルマをすべて切った段階、ね。だから、前生のカルマを切っているから、どうなるかというと、その人の、要するにスープも全部平らげた状態。その人がだよ、その修行の過程に

おいて糞尿しかなければ、糞尿のデータしか出てこないよ。わかるよな。で、まあ糞尿は糞尿として経験しながら、要するに一生懸命、善法増大、悪法減少、止滅の行、法行を実践することによって、ね、その人は、今度はその糞尿が終わった段階で、次はその大いなる功徳により転生するんです。わかるかな。ということだよ。

（質問者D） まだ、ちょっと錯覚を起こしているところがあるかもしれません。例えば、『マハーヤーナ』（以前の教団機関誌）によく書かれてますシャクティーパットをすることによって、前生の何生か分もの経験を凝縮して経験することができるというのとこれとの関係は…。

（尊師） いや、だって、それは関係ないでしょ。シャクティーパットというのは、マハー・ムドラーを成就した後に他人のデータをどんどんどんどん吸収して、煩悩のデータを吸収することによって、それを今度は止滅に向かうわけでしょ。だからデータとしてはどういうことかというと、他人の持っている、要するに、例えばいろんな味著とか、あるいは過患とかがデータとして入ってくるわけだよね。

（質問者D）はい。わかりました。

◉どこにスポットを当てるか

（質問者B）少し細かいところかもしれないんですけど、五蘊が生起するという場合に、意識、意志、イメージ、感覚、肉体で、前の生とその前の生があって、前の前の生にあった、つまり前の前の生の終わりから前の生への過程で、魂が肉体から出て転生していきますよね。そのときに、魂ですか、その魂にはやはり、変な言い方をすると意識というものがあるんじゃないかと思うんですが。

言いたいことは、要するに、新たにパッと意識が生起されるんじゃなくて、一生一生のデータが加わっていって大きく変形することを五蘊が生起とおしゃっているのか…。

（尊師）ん、じゃないんだよ。どういうことかというと、例えばわたしたちがどれくらいの識別能力を持ってるか、あるいは意識を、自分の持っている意識を経験できるか考えてごらん。おそらくそれは、膨大な意識の中のあるスポットだと

思うけど、どうだ。

（質問者B）ええ。それは、要するに、いつも例えば生きてる場合、または死後のときの意識がとらえているそのスポット…。

（尊師）スポットじゃない？　ということは、例えば、そのスポットが移動する場合だってあるでしょ。条件によって。どうかな、それは。

（質問者B）わかります。ただ、それは、死を境にして大きく、例えば生きてるときに経験する以上に経験が…。

（尊師）あります。例えば、どういうことかというと、例えば人間から動物へ転生したとするね。その人はとにかく、前生において暴力を振るい、あるいは弱い者をいじめ、あるいは、かみついたり、蹴ったり、殴ったりと。あるいは、悪口、罵り、その他をずっと経験してたとしよう、例えば。そうすると、当然その人はその生のカルマによって…。

（質問者B）スポットの当たる部分がズレるわけですか。

（尊師）ズレるんだよ。

（質問者B）ということは、要するに全体をいうならば、それはデータの集まりみたいなもんで、どこにスポットを当ててるかというのは、その意識、感覚…。

（尊師）そうです。だから、ポアが起きるんだね。つまり、自分のスポットを当てる位置を変えていくことがポアだから。

◉スポットの当たる位置

（質問者B）で、尊師がおっしゃった前生のカルマを切るというのは、そのスポットの当たる位置を変えることをいっているのか、それとも…。

（尊師）ではない。

（質問者B）そのデータ自体を滅尽すること。

（尊師）そうです。例えば、それはどういうことかというと、これはいけませんよとはっきり認識すると、曖昧じゃなく。ところが、そこにスポットが当たったとき、これはいけませんよというデータがあるよね。これは滅尽だよね。わかるよね。ところがそうじゃなくて、普通は全部が曖昧なんです。混沌としてます。

だからスポットが、例えば、まあ天界のスポットに当たれば、天界の楽しみがある。地獄のスポットが当たれば地獄に落ちると。

わたしがよく、例えば、まあ今、足を大変傷つけたり、いろいろな傷があるわけだけど、それをわたしはよしとするのは、そのときに記憶修習ができるわけなんだね。例えば、それは何を表わしてるかというと、地獄を表わしてると。肉体的な苦痛だから。でしょ。その肉体的苦痛のときに、ちゃんと到達真智運命魂としての意識が持てるかどうか。これを修習してるわけだよね。もし、それが完成すれば、地獄へ例えば落ちたとしたって、意識は到達真智運命魂。ということは、地獄の住人が救済できるじゃないかと。

だから、そういうことを考えるならば、四つのヤーナが理解できると。ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナ、ね、それから無上最上のヤーナというのが理解できるようになってくる。

つまり、ヒナヤーナだと、その遠離した状態での経験の止滅はできるけど、それがポッと今度は大衆に放り込まれたとき、また煩悩が生起してくる。でしょ。

これは、滅尽の仕方が弱いわけだよね。

（質問者B） ヒナヤーナの場合は、あるデータ、Aというデータがあって、これは楽しい、まあ、これは別に食は楽しいでもいいんですけど。で、その滅尽の仕方、もし滅尽という言葉を使うなら、それには、要するに食は楽しくないぞというデータがたくさん入っていて、否定のデータが押さえつけたような感じなわけですね。

（尊師） まあ、楽しくないぞと単純にいうんじゃなくて、食は苦であると。なぜかというと、瞑想の妨げになるというデータがたくさん入っているよね。ところが、楽しみの方が勝っちゃったら、もう終わりなんだよね。

（質問者B） はい。で、まあ全体として見れば、要するに食によって一応動かない状態になっている。

（尊師） というよりも、食のないところで生活し続けるから。例えば、一食のできる環境で生活し続けるから。

（質問者B） そういうような状態になることも含めて、滅尽と…。

（尊師）そうだね。それが遠離、離貪からくる喜びでしょ。これは楽しみだよね。

（質問者B）わかりました。

◉自分で煩悩を現わし、自分で破壊する

（質問者E）よろしいですか。今の足の例ですけど、これは自分自身で煩悩を現わし、それを自分で破壊していくっていうたとえとイコールになるんでしょうか。

（尊師）そうだね。要するに、自分で煩悩を現わし、自分で煩悩を破壊するというたとえとイコールだね。

◉到達真智運命魂の記憶修習

（質問者A）先程、例えば地獄に行ったとしても、供養値魂の心の状態であるというふうに言われたと思うんですが、まあ、そういう修習をしてるということですね。それは…。

（尊師）供養値魂じゃなくて、到達真智運命魂。

（質問者A）あ、すみません。到達真智運命魂ですね。その修習をしていればそういうふうになる、つまり記憶修習をしていればそうなると言われたんですけども、例えばどういう記憶修習をやるんですか。例えば、「自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする」とか。

（尊師）例えばわたしの場合？　まず、感覚の状態をチェックします。

（質問者A）感覚の状態をチェックするんですか。

（尊師）うん。つまり、感覚の止滅の状態はどうであるか。だから、最も感覚が生起しやすい状態、例えば、オキシドールの中にドボッと足を突っ込んでみて、ね、そこでまあ、足がどんどんどんどん溶け出すわけだよね、要するに。それをジーッと感じながら、例えば全然感覚が生起しなかったら、「あ、わたしは、もう地獄へ落ちたとしても地獄の苦しみはないな」と思うんだね。OKかな、ここまでは。

そうすると、次の状態で、その苦しみの現われ方は、例えばわたしが肝臓ガンを死滅したがゆえに現われている現象であると。なぜかというと、それをもう少

し、まあ生きて君たちに指導しなきゃならないと考えたから、肉体にこれは現われてきた現象であると。

だとするならば、それは素晴らしいことである。もっと、内側の毒が体に現われて、そして、そこで一般にいうところの苦しみが生起したら、それはそれで、ね、到達真智運命魂としてはうれしいわけだ。ね。そして、もっと多くの人の煩悩が自己の内側に入り、いろんな形で消化されて、すべての魂がマハー・ニルヴァーナに入りますようにと、例えば考えると。しかも、そのときの考えるという意味はね、他の想念がいっさいわかないで考えられるかどうかなんだ。

（質問者A） つまり、集中してるかどうかっていうことですね。

（尊師） ん、まあ、単純に集中という意味とは違うんだけどね。どう説明したらいいのかな。その状態になり切ってるかどうかだね、要するに。

（質問者A） なり切ってる。

（尊師） うん。集中というのは、ある状態をキープし続けるということだよね。で、それは、集中を外したら、それが消えてしまうわけだから、そうじゃなくて、

集中を外してもそういう意識状態になり切っているかどうかということなんだ。

（質問者A）はい、わかりました。

（尊師）だから、例えばだよ、俺は布施を、ね、例えばできるんだとか、俺は布施の実践をするぞと、例えば思ってる人がいたとしようじゃないか。例えば、身の供養をしなきゃなんないとき、ポッと身の供養をできるかと。例えば、ね、愛著している妻とか、あるいは子供の供養をしなきゃなんないとき、ポッと供養ができるかと。それを実際に、その行動に移せるかどうかと。

これが、だから無上最上の乗の修行のポイントになるわけだよね。タントラ・ヴァジラヤーナというのは、それをグルがだいたい現わしてくれるんだよ。だから、タントラ・ヴァジラヤーナは言い方を換えれば、グルヨーガという系統に入るわけだよ。

他に質問はないか。プンナ（正悟師）はどうだ。

◉グルのフォーム

（プンナ）ああ、今のところありません。すごく勉強になります。どうもありがとうございました。自分の状態がちょっとわかんない状態になったときがあって、今日の説法でよくわかりました。マハー・ムドラーの説法としては。はい。

（尊師）そうすると、わたしの採る行動というのはよくわかるだろう。だからこれは正悟師は特に気をつけなきゃなんないのは、わたしが優しくなったら終わりだよ。つまり優しくなったら、ああもうこの人は、例えば大乗だとか、この人は小乗とか、この人はタントラ・ヴァジラヤーナだとかね、まあ、そういう規定に入るわけだよね、要するに。

というかね、これは皆さんよく考えていてほしいのは、わたしにとっては一般的にいわれる善行を君たちにそのように見せるのが一番楽なんです。つまり、君たちがイメージしているグルのフォームを採るのが一番楽なんだよ。なあ、マンジュシュリー、そう思わないか。

（マンジュシュリー）そうですね。

（尊師）だから、たまにはそういうフォームを採るんだよ。そうすると、錯覚を起こすでしょ。ん、これはグルは演技をしているんだろうかと。だから、実体はそこにはないということだよね、要するに。

いいかな、ここまで。

◉識別――どのパートが優位になるか

（質問者B）尊師、また元に戻って申し訳ないんですけど、行は、わたしの理解したところでは、尊師のお言葉で、食や嫉妬や、まあいろいろの死ぬ前の生に付き合ったものが出てくると。で、次に識別がそれに対して生起すると言われたわけですけど、その…。

（尊師）つまりね、例えばMが今生で経験した経験の総量とはものすごいものがあると思わないか。その中のどのパートが優位になっていくかということが、次あるよね。全体は表現されないわけでしょ。どうかな。それが識別なんだよ。

（質問者B）はい、それが識別？

（尊師）つまり、固定化していく段階ね、経験が。
（質問者B）行というのは、データの総量ですか。
（尊師）経験の要因の生起と。
（質問者B）経験の要因の生起というのは、経験一つ一つより、もうちょっと根本的な、その…。
（尊師）ワーッとコーザルのデータが出てくるよね。その状態だ。真我がそこに没入している状態。
（質問者B）それで、その優位な部分を中心として傾向みたいなのが…。
（尊師）そう識別で現われてくる。
（質問者B）識別で現われてくる。それに基づいて…。
（尊師）名色が完成する。

◉識別の主体

（質問者B）そうすると、この識というのは、識別というのは、何が主体になる

んでしょうか。具体的な内容というか。

（尊師）やっぱり、真我が選択するんだろうね、それは。無明によって。非神秘力によって。

（質問者B）データに基づいて――変ですけど、その生、その時点なりの真我の価値観というか、まあ、心の働きみたいな…。

（尊師）そうそうそうそう。心の働きというか、色眼鏡で見て、これがよしとするような部分を選択するわけだね、そこで。

（質問者B）で、それと、次の段階の名色で形成される意識というのは、同一ですか。

（尊師）いや、だから、その次の名色で形成されるのは、要するに五大エレメント、つまり形状界における身体と、それから他の四つのものが形成されていくわけでしょ。

（質問者B）はい。じゃあ、要するにそれは、その前の意識っていうのは、真我が主体となって色眼鏡で見るような、色眼鏡みたいなもので、で、それを今度は

覆うような感じで、また意識っていうのが出てくる…。

（尊師）その識別の意識は残っているんだよ。で、それによって、今度は形状界でイメージの身体が形成されていくよね。それが名色だね。

（質問者B）はい。で、そこらへんで、後で残ってはいるんですが、身体が形成されて、その形成後経験したことも含めて意識っていう…。

（尊師）そうだね、意識というのはそういう感じだね。ただ、一般にいう、まあ人間界でいわれている意識というのは、その中のスポットを当てられた部分と。

（質問者B）で、五蘊の意識というのは、一応その全体…。

（尊師）五蘊の意識というのは、正確には全体を指すけど、一般には、その生、その人が所有しているスポットだろうね。他は関係ないから。

◉スポットを当てているもの

（質問者A）スポットを当てている対象というか、当ててるものというのは…。

（尊師）だから、スポットを当ててるものっていうのは、先程言った真我の傾向

ということでしょ。

（質問者B） つまり、そこしか見ないわけですね。

（尊師） そうそう、そこしか見ない。それはよくあるでしょ、それ。例えば、例として挙げるならば、ここにレストラン街があると。ラーメン屋、うどん屋、チャンポン屋、そば屋、ね、それからカレーライス屋さん、それから例えばすし屋、ね、中華料理屋、フランス料理屋等々があるとしようじゃないか。パッと目をつぶって、それぞれ、はい、その中のどこに入りますかと聞いた場合、全体は絶対意識しないと思うよ。入るとこしか意識しないと思う。

（質問者B） つまり、今までの経験で、そのレストラン街の中で、ラーメンがいいんだというデータがあって、まあ、そういうラーメン優位の行のデータがあって、で、そしてラーメンに何となく向かうという識があって、そしてそのラーメンを意識してるようなものがあって、そして実際入っていく感じになるんでしょうか。

（尊師） そうです。

◉五蘊の識別と十二縁起の識別は同じ

（質問者A） また、よろしいでしょうか。五蘊の中の識別と、十二縁起の識別が生起するというときの識別というのは、同じと考えてよろしいんでしょうか。

（尊師） 同じと考えていいです。

（質問者A） ということは、その五蘊の中の識別というのは、これは好むとかこれは好まないという、その識別というふうに考えてよろしいんでしょうか。

（尊師） そうだね。まあ、好む好まないまではいかないまでも、傾向を表わしてるのは事実だね。

（質問者A） 傾向ですか。

（尊師） ここへ行こうとか、例えば、こういうものがいいとか、こういうものが悪いとか、こうしたいとかいうことだね。あまり強烈な傾向じゃないわけだ。

（質問者A） 弱い傾向ですね。弱いといったらおかしいけど、まあどっちかというと弱い傾向。

（尊師） だから、例えば、ここで問題になってくるのは、その愛と愛著の違いが

出てくるわけだけど、愛というのは、ラーメンを一回食べたと。おいしいと思うと。これは、愛だよね。ところが、愛著というのは、もうラーメンしか食べたくないと。ひたすらラーメンを毎日食べると。今日は、例えばカレーのカップヌードル二個だとか。こういうふうな、これは愛著だよね。

この愛著、つまり取著によって、その世界へと入っていこうとするわけだね。例えば、その愛著なるがゆえに、初めは自分で買わなくても、そのうちカップヌードルの、ね、自動販売機の所に行きたくなって行くでしょ。それと同じような形でいくんです。

でね、ここで問題になってくるのは、カップヌードルを例えば買いに行くと。そして、そこにカップヌードルのスタンドがあると。ここまではいいわけだよね。そうすると、そこに、例えばチンピラがいるかもしれない。これは、その人の他の要因で決まるね。チンピラがいて、「目つきが悪い」と殴りつけられるかもしんない。行った要因は何かというと、本人はカップヌードルのつもりであるけども、他の要因によって違う。あるいは、例えばカップヌードルを買いに行った。

そこに例えば素敵な異性がいて、その異性と今度は出会うことによって、そこから恋が芽生えるとか。それは、徳で決まるわけだよね。徳というのは、他の要因で決まるわけだよね。つまり、一つの要因ではないわけだよね。でしょ。

（質問者A）はい。

◉仏教徒と観念的宗教の違い

だから仏教徒と、それから他の観念的宗教との違いというのは、現象を例えば見ても、その現象で、即いいんだ悪いんだと判断しないんだね、仏教というのは。というよりも、どちからというと、そういうグナの干渉が起きやすい状態で心を止めていく修行をやっている方を高等だというと考えたら、よく仏教全体が理解できるはずである。

だから、こういう法があったでしょ。サキャ神賢が亡くなられる前に、まあ、鍛冶屋のチュンダが食の供養をするよね。で、この食は如来以外受けてはならないと。あとは埋めなさいという表現があるけども、あれは二つの意味があって、

一つは、もちろんその中に猛毒のきのこが入ってるということもあるわけだけど、もう一つはそういうグナに干渉されたら、例えば弟子たちが苦を生起させて、で、その苦に負けてしまうと。そこで、否定的な感情が出てくるということもあるわけだよね、あれは。だから、自己の本懐、自己の土壌で闘いなさいというのは、そういう意味なんだよ。

つまり、ヒナヤーナの土台しかできてない人が、マハーヤーナで闘ったら絶対負けるし、マハーヤーナの土台しかできてない人がタントラ・ヴァジラヤーナで闘ったら絶対負けるしね。タントラ・ヴァジラヤーナの土台しかできていない人が、例えば無上最上のヤーナで闘ったら負けるしね。ということなんだよ。

◉土台を形成するもの——記憶修習、記憶実践

（質問者A） その土台を形成させるのも、やっぱり記憶修習になるんですか。

（尊師） ではないね。やっぱり記憶修習、記憶実践だろうね。記憶修習してても、それが実践できなければ意味がないわけだから。

（質問者A）それは、先程の身の供養のたとえ…。

（尊師）そうです。記憶修習はしてるんだけど、実践はできないと。

◉慈愛と哀れみの関係

付記としてね、一つだけ、スポットだという証明をしたいのは、こういう話があるでしょう。この世の中が滅亡して、ね、すべての魂というか、ほとんどの魂は光音天へ行くと。残った魂は、他の宇宙の地獄へ移されると。でしょ。で、その光音天から、まず一番初めに徳がなくなって死没したものが、次は神聖天へ生まれ変わると。だよね。

これ、おかしいと思うよね、まず。何がおかしいかというと、徳がなくなって一番に落ちた魂だよね、これは。どうかな。ところが、その神聖天は、次に例えば光音天からどんどん落ちてくる魂より形状・容姿が良く、色合いが良く、大きな光を放っていると。だよね。どうだこれは。わたしが何を言いたいかわかるかな。

それは、ちょうどこれで表現できるんだよ。広大な愛を、慈愛を持ってる人がいたとしようじゃないか。しかし、悲については、まだ中途半端だと。ね。もう一方はそうじゃなくて、悲はある程度あるんだけど、愛もある程度しかないと。この場合どうなると思うか。光音天でのキープの仕方というのは、つまり継続集中の力というのは、どちらの方が長いと思うか。どうだ、M。

（M）ある程度ずつの方が長い。

（尊師）長いよな。うん。そうすると、その光音天から先に落っこちるよな、当然。

（質問者B）ある程度というのは、どっちなんでしょうか。

（尊師）ん、つまりある程度ずつの方が、光音天には長くとどまって、広大な慈愛と、それからわずかの哀れみしかない方が先に落ちるよね。

（質問者B）哀れみは、要するにブレーキみたいなもの。

（尊師）いや、というか、愛が、慈愛が神聖天なんだよ。で、光音天は、哀れみなんですよ。カルマ的には。そうすると、ところが、今度は落っこった段階で、

ここの世界は慈愛だから、どうなるかな。逆転するよね。ということなんだよ。だから、どのスポットが――まあその宇宙観については、世界観についてはまたね、まあ今回君たちにどんどん説法していきたいと思っているから、旅の合間にいろいろ明かすけど。

◉神聖天にも段階がある

（質問者C）今おっしゃってる神聖天にも何段階かある、その階層の特性のことをおっしゃっている…。

（尊師）神聖天って、四段階あるでしょ。

だから、ちょうどそれはね、もっと別のわかりやすい表現を使うならば、ここに二人の人がいたとしようと。一人の人は大変文章を書く力は持ってるけども、例えば運動は大変鈍いと。運動神経は。もう一人の人は、運動神経は大変素晴らしいけども、ね、文章を書く力はないと。で、授業として、国語と体育の時間があったとして、どうかな。当然、国語の時間は文才のある方が優位に立つだろう

と。どうですか、これは。ところが、これがスポーツの時間に入ると、逆転するよね。　だから、わたしたちの世界というのは、しっかりと智慧をもって現象を見ればいろんなことがわかるんだよ、そうやって。同じことがいえるわけ。で、真理勝者というのは、だいたいすべてにおいて優れているけどね。ところが、ヒナヤーナでは優れさせないわけだよね。それは関係ないと。いいかな。

よし、じゃあ、終わりにしよう。

一九九一年五月二十七日　インド・デリーにおいて

質疑応答

◉真我が三グナに巻き込まれた理由

（質問者A） 十二縁起の無明と行について質問します。まず、無明とは、未熟な真我が独存位の状態から三グナに巻き込まれてしまったことと説明されています。ということは、三グナに巻き込まれてしまった真我というのは、集中力が足りずに三グナという雑念に巻き込まれてしまって、苦悩の世界に巻き込まれてしまったと見てよいのでしょうか。

（尊師） それについては、『マハーヤーナ』で何度も説明していると思うけどな。どうだ。比喩を使った説明が何度もあると思うけど。M君は、質問はするけど、教学ができてないんじゃないか。

（質問者A） あ、すみません。

（尊師） 例えば、その内容については、こういう比喩が一つあるよね。もう、わ

たしは結婚はこりごりであると思ってる人がここにいたとしましょうと、ね。ところが、ね、別れた奥さんよりもっと素敵な女性が現われ、その人の好みだったら、心はどう動くだろうかと。でしょ。当然、そこへもう一回誘惑されたら巻き込まれてしまうと。わかるかな、言ってることは。だから、未熟な魂といっているんです。そういう形で、無明から行へと落ちていくんです。

（質問者A） それから、行についてお聞きしたいんですけれども、行というのは、コーザルに落ちた真我が身・口・意の行ないを始めると説明されていて、この点でちょっと疑問に思ったんですけれども、コーザル世界は意識だけの世界なのに行の中に口の行ないと身の行ないが含まれているのはどうしてでしょうか。

（尊師） 例えば、ここに透明な磨りガラスがあったとして、それに赤色を塗ったらどうなりますかと。あるいは、緑の色を塗ったとしたらどうなりますか。あるいは、白色を塗ったらどうなりますか。赤は赤として映り、緑は緑として映り、白は白として映るんじゃないか。

（質問者A） はい。

（**尊師**）つまり、君の中には、コーザルを物質であると、まあ考える無智があるわけだね。まず一つ言っておきたいことは、三つの世界観については、知識で入れるんではなくて経験をする必要があると。例えば、どういうことかというと、先程言った、わたしの誘惑の話。この誘惑の話を理解しようとすれば、今の質問は出ないはずなんです。あるいは、今のわたしの透明なガラスのたとえを理解しようとするならば、そういう質問は出ないはずなんだよね。つまり、真我はどこにあるかといったら、コーザルにあるんじゃないの、絶えず。どうですか、それは。例えば、真我はこの肉体のどこにありますかと。どこにありますか。

（**質問者A**）わかりません。

（**尊師**）真我は、肉体の心臓にあるんじゃないの。心臓のコーザルにあるんじゃないか。

（**質問者A**）ああ、『生死を超える』には、そう書いてあります。

（**尊師**）ということは、落ちたという表現の裏側に何を意味するかというと、その真我のコーザルの分化した意識が、他の例えばアストラル、あるいはこの現象

界の肉体、粗雑な物質を、要するに我と錯覚し、この肉体を形成してる状態と考えるべきじゃないのか。

（質問者A）あ、はい。

（尊師）ということは、行ないというのは、身・口・意の三つの行じゃないのか。

（質問者A）はい。

（尊師）ということだ。

（質問者A）はい、わかりました。ありがとうございました。

（尊師）ところがね、今わかりましたと言って、じゃあ説明しなさいと。説明できるか、君は。

（質問者A）言葉の上でだけわかったということで、その本質というものは理解できません。

（尊師）ということは、もっと土台の修行を一生懸命やりなさい。

（質問者A）はい、わかりました。ありがとうございました。

一九九一年一月二十二日　阿蘇・シャンバラ精舎において

◉人間はなぜ生まれてきたのか

（質問者B） 僕らは毎日こうして生活してるんですけれども、やっぱり一番疑問に思うのが、どうして僕たちは生まれてきて、こうして生活して、最終的には死んでしまうんですけども、こうやってお金稼いだり、勉強したりして、結局、何を目的として暮らしていくのか知りたいんですけど。

（尊師） 大変いい質問だと思うね、それは。まず、人間がなぜ生まれるかというのは、十二の条件生起の法というのがあります。この十二の条件生起の法というのは、まあ君たちは正しくない言葉で、「あいつはわたしに因縁をつけた」とかいうわけだけど、その因縁、これは十二因縁の法とか、十二縁起の法とかいわれている、これは正確に訳すると、十二の条件生起の法という言葉で表わすことができると。

で、その十二の条件生起の法そのものが、わたしたちがこの人間の世界へ生まれてきたプロセスをしっかりと説明していると。よって、その十二の条件生起の法についてお話をしましょう。

まず、わたしたちが死というものを迎えた直後、わたしたちはまず気絶状態に入ります。この気絶状態に入るというのは、この粗雑な人間の世界をすべてであると考えている意識がそこから解き放されるときに、そのショックによって気絶をするわけです。そして、その気絶状態に入ってその次の段階で、経験の構成を認知するプロセスに入ってくると。

経験の構成を認知するとは何かというと、例えば、その前の生においてロックをたくさん聞いていたとか、あるいはジャズをたくさん聞いていたとか、あるいは科学の本をたくさん読んでいたとか、あるいは実際に科学の研究をしていたとか、あるいは、例えば食べ物で信州そばをたくさん食べていたとか、そういう経験の構成が甦ってきます。

で、経験の構成が甦ってきた段階で、次は識別作用が生じます。識別作用というのは、その経験に基づいてどの世界へ行こうかという識別作用が生じます。で、そして自分の望む世界はここであるというそういう識別が生じた段階で、次は先程述べたとおり、形状-容姿と心の働きのみが存在する世界へと至ります。この、

心の働きと形状-容姿というのは、要するに触れることのできない身体と、そして心の働きが同時に存在している世界へと移行していくわけだね。

そしてその次の段階で、その心の働きと形状-容姿の六つの器官、これは、目、耳、鼻、口、ね、そして触覚という五つと、それから心の働きの六つが外界と接することにより、というのは、この心の働きと形状-容姿の世界にはたくさんの他の生命体がいますから、外界と接触することにより、そこで感覚が生じてくると。

そして、感覚が生じるがゆえに、次はもっともっとより強い感覚を得たいと。これは、例えばおいしいものを食べたらよりいっそうおいしいものを食べたいとか、あるいはわたしたちが性的快楽に対して縛られているのと同じように、よりいっそう強い渇愛が生じてきます。つまり、欲求が生じてくるわけだね。

そして、その欲求が生じてきた段階で、その次の段階で、その欲求なるがゆえにとらわれるようになります。例えば、恋愛においても、あの人でなきゃ駄目だとかこの人でなきゃ駄目だとか、食べ物でも、わたしは例えばカレーが好きなん

だけどラーメンは嫌いだとか、このような形のとらわれ、愛著が生じてきます。

で、実はその愛著が生じた瞬間に、それと同時に、裏側に嫌悪、つまりあの人は嫌いだこの人は嫌いだといったような感情も生起するわけだけど、まあそれはいいとして、その相反する感情が生起した次の段階で、それを具体的にもっともっと経験したいという心の働きが働きます。そして、子宮へと至るわけです。

子宮へと至った魂は、もう君たちも知ってのとおり、そのまま生存へと至ると。これが、わたしたちがこの世に生まれてきた意味合いです。ですから、この世に生まれてきた意味合いというのは、要するに欲望、煩悩というのがあって、その煩悩によって生まれてきてるんだということになるわけだね。よろしいでしょうか。

一九九一年十一月一日　信州大学・大学祭において

※オウム真理教では、本来の意味を正確に表わしていない既製の仏教用語は用いず、パーリ語原典を忠実に翻訳し、吟味した結果、決定した訳語を使っています。以下に、代表的な言葉の対比表を掲げますので参照してください。また、仏教・ヨーガの言語対比表も参考までに掲載しました。

◆言語対比表

欲界→愛欲界
無間地獄→超期間激苦地獄
叫喚地獄→号叫激苦地獄
鉢特摩地獄→紅蓮華のような状態になる激苦地獄
阿修羅→不飲酒天

憤怒天→意識堕落天
戯忘天→戯れ堕落天
地居天→地上愛欲神天
四天王衆天→四大王天
持国天→堅固王国天
増長天→成長天
広目天→統治変化自在天空天
毘沙門天、多聞天→守庶民外傷天
夜叉→人食い鬼神
忉利天→三十三天
帝釈天→有能神
夜摩天→支配流転双生児天
閻魔王→支配流転双生児王
兜率天→除冷淡天
楽変化天、化楽天→創造満足天

他化自在天→為他神以神通創造欲望満足従事天
悪魔→破滅天

色界→形状界
梵天→神聖天
梵衆天→神聖衆愛欲神天
梵輔天→神聖臣天
大梵天→大神聖天
浄天→美天
遍浄天→総美愛欲本質神天
広果天→偉大果報愛欲本質神天
浄居天→清潔居住天
無煩天→超空間愛欲神天
無熱天→超燃焼愛欲神天

善現天→善安楽愛欲神天
善見天→善現象愛欲神天
色究竟天→超越童子愛欲本質神天

無色界→非形状界
空無辺処→空間無辺境
識無辺処→識別無辺境
無所有処→無所有境
非想非非想処→非認知非非認知境

想受滅→認知経験滅尽

須弥山→完全無欠山
東勝身洲→東の高貴なる身体を得る大陸
南贍部洲、閻浮堤→南のバラリンゴの大陸

西牛貨洲→西の願いがかなう牛の大陸
北倶盧洲→北の悪しき音の大陸

成劫→再生期
住劫→継続期
壊劫→還元期

釈迦牟尼→サキャ神賢
如来→真理勝者
応供→供養値魂
正等覚→最上正覚者
明行足→智徳成就者
善逝→最上善逝
世間解→世間解（変更なし）
無上士→無上士（変更なし）

調御丈夫→丈夫調御者
天人師→天人師（変更なし）
仏陀→覚者
世尊→世尊（変更なし）
菩薩→到達真智運命魂
比丘→向煩悩滅尽多学男
比丘尼→向煩悩滅尽多学女
優婆塞→帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽→出家教団
長老→高弟
声聞→多学の弟子
沙門→出家修行者
沙弥→少年出家者
遊行者→托鉢修行者

バラモン→祭司
クシャトリヤ→武人
ヴァイシャ→庶民
シュードラ→奴隷

四双八輩→四対の人々・八つの宗教的特性を持つ人々

預流→真理の流れに入ること
一来→（愛欲界に）一度だけ再生すること
不還→不還（変更なし）
阿羅漢→供養値魂

四預流支→四つの真理の流れに入る段階

四聖諦→四つの絶対的真理
苦聖諦→苦しみの絶対的真理
集聖諦→苦しみの生起の絶対的真理
滅聖諦→苦しみの滅尽の絶対的真理
道聖諦→苦しみの滅尽に至る方法の絶対的真理

四念処→四つの記憶修習述

四正断→二正断二正勤
断断→現在悪業断
律儀断→未来悪業断
修断→現在善業勤
随護断→未来善業勤

四如意足→四つの如意の基礎
欲如意足→決意如意の基礎
精進如意足→精進如意の基礎
心如意足→思念如意の基礎
観如意足→観慧如意の基礎

五根→五つの潜在性
信根→信の潜在性
精進根→精進の潜在性
念根→記憶修習の潜在性
定根→サマディの潜在性
慧根→智慧の潜在性

五力→五つの能力
信力→信の能力
精進力→精進の能力
念力→記憶修習の能力
定力→サマディの能力
慧力→智慧の能力

七覚支→七つの覚醒段階
念覚支→記憶修習覚醒段階
択法覚支→検討覚醒段階
精進覚支→精進覚醒段階
喜覚支→喜覚醒段階
軽安覚支→静寂覚醒段階
定覚支→サマディ覚醒段階
捨覚支→無頓着覚醒段階

八正道→聖なる八段階の道
正見→正見解
正思惟→正思惟（変更なし）
正語→正語（変更なし）
正業→正行為
正命→正生活
正精進→正奮闘
正念→正記憶修習
正定→正サマディ

三苦→三つの苦しみの本質
苦苦→苦しみの苦しみの本質
行苦→悪い構成要素の苦しみの本質
壊苦→悪化の苦しみの本質

三受→三つの感覚
楽受→楽の感覚
苦受→苦しみの感覚
不苦不楽受→不苦不楽の感覚

四無量心→四無量心（変更なし）
慈→慈愛
悲→聖哀れみ
喜→聖称賛
捨→聖無頓着

五取蘊→五つのとらわれの集積
色取蘊→形状・容姿のとらわれの集積
受取蘊→感覚のとらわれの集積
想取蘊→表象のとらわれの集積

行取蘊→経験の構成のとらわれの集積
識取蘊→識別のとらわれの集積

五蓋→五つの障害
貪欲蓋→愛欲の興奮による障害
瞋恚蓋→害心による障害
惛眠蓋→頑固と愚鈍による障害
掉挙蓋→興奮と後悔による障害
疑蓋→疑念による障害

五妙欲→五つの愛欲の構成部分
色→形状・容姿
声→声（変更なし）
香→香り
味→味（変更なし）
触→接触

五下分結→五つの下位に結び付けるきずな
有身見→有身謬見
疑→疑念
戒禁取→戒誓のとらわれ
貪欲→愛欲の興奮
瞋恚→害心

五上分結→五つの上位に結び付けるきずな
色貪→形状愛著
無色貪→非形状愛著
慢→慢（変更なし）
掉挙→興奮
無明→非神秘力

八解脱→八離解脱
八勝処→八勝境
十遍処→十全境
十波羅蜜→十の徹底

十二縁起の法→十二の条件生起の段階
無明→非神秘力
行→経験の構成
識→識別
名色→心の要素・形状・容姿
六処→六つの感覚要素と対象
触→接触
受→感覚
愛→渇愛
取→とらわれ

有→生存
生→出生
苦→苦しみ
信→信（変更なし）
悦→歓喜

喜→喜（変更なし）
軽安→静寂
楽→楽（変更なし）
三昧→サマディ
如実知見→如実精通見解
遠離→現世否定
離貪→離愛著
解脱→離解脱

涅槃→煩悩破壊
般涅槃→完全煩悩破壊
中般涅槃→中完全煩悩破壊
生般涅槃→減少完全煩悩破壊
無行般涅槃→形状界にて経験の構成がなく功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊
有行般涅槃→形状界にて経験の構成があり真理の実践による完全煩悩破壊
一種者→一種者（変更なし）
家家者→徳の高い家から家へと転生する者
極七返→最高七回流転者

正智→正精通
正解脱→正離解脱
心解脱→心の離解脱
慧解脱→智慧の離解脱
殺生→殺生（変更なし）
偸盗→窃盗
邪淫→愛欲における邪悪な行為
妄語→虚言
綺語→軽薄語
悪口→悪口（変更なし）
両舌→中傷
貪→愛著
瞋→邪悪心
癡→迷妄

愁→不運な出来事
悲→悲嘆
苦→苦しみ
憂→激痛
悩→悩み

五趣→五つの方向
善趣→幸福に向かうこと
悪趣→悲痛に向かうこと

カルマ→要素の蓄積
法→法則
梵行→神聖行
布薩→戒誓行
波羅提木叉→約束維持解放

頭陀→断修行障礙
袈裟衣→赤っぽい黄色の衣
衆生→生命体
四大種→四大元素
本生経→輪廻転生談

◆仏教・ヨーガ　言語対比表

愛欲界―現象界
形状界―アストラル世界
非形状界―コーザル世界
愛著―サットヴァ
邪悪心―ラジャス
迷妄―タマス

麻原彰晃の世界 シリーズ

人はなぜ麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？
その答えがこの本に集約されている。
麻原尊師の多彩な魅力を満載したファン待望のシリーズ。

絶賛発売中!!

PART-1
幸福に至る四つの実践

仏教の基本ともいえる「四預流支」。多彩な側面から縦横無尽に説いた画期的な説法群は、魂の解放を願う人にはもちろんのこと、幸福な人生を求めるすべての人に本当の生き方を指し示す。

B6判　定価2500円

PART-2
尊師、麻原彰晃が斬る！

願望成就の秘訣、UFO&宇宙人、医学、幼児教育、音楽、食養、輪廻転生etc……。麻原彰晃尊師の魅力たっぷりの説法に、歌手、鹿島とも子さんとの対談も加わって、ますます充実。

B6判　定価980円

PART-3
真実！六道輪廻

永遠の真実"六道輪廻"。すなわち、わたしたちはこのサムサーラ（苦界）をさまよい、苦しみ続けているのだ。果たして、ここから抜け出すことはできるのか？臨死体験・大霊界・チャネリングなど、間違いだらけの死生観に終止符を打つ書。

B6判　定価980円

PART-4
宗教にだまされるな！

霊障、水子供養、先祖供養、守護霊……。この世にはびこる間違った観念を打ち破り、正しい道を説き示す麻原彰晃尊師。本当の幸福と心のやすらぎを得たいあなたに。

B6判　定価980円

PART-5
絶対の真理

善業も悪業もなしたことが必ず返ってくる——幸福・不幸の根本原因であるカルマの法則を多くの実証例を交えて説く。

B6判　定価980円

PART-6
願望成就の秘法

安全で確実な願望成就の秘法とは？　仏教の教義にのっとった正しい願望成就法により、この世での願望は本人も気付かぬくらい自然とかなってしまう……。さらには、解脱・悟りにまで至れる方法を惜しげもなく公開。

B6判　定価980円

PART-7
仏教真理　八正道

最終解脱者のみが語り得る八正道の真の意味合い。高い解脱・悟りへ至る道を、具体的に、現代でもすぐに実践できる方法として説き明かす。巻末に「道に関係づけられた経典（道相応）」の現代語訳も掲載。

B6判　定価800円

PART-8
仏教真理　六波羅蜜

大乗仏教における在家信徒の最も重要な修行法の一つ、六波羅蜜。この修行プロセスを着実に実践しさえすれば、在家でも必ず解脱へと至れる！巻末には、高弟たちの体験談の特別付録付き。

B6判　定価800円

近日発刊予定

PART-9
尊師、聖地インドを行く

B6判　定価750円

尊師がインドを行く。不思議な神秘の力によって、様々な過去の事実を明かされる尊師。第一部では、信徒と共に行かれた巡礼の旅の全記録を、そして第二部ではなんと、今まで部外秘だった直弟子用奥儀説法を満載！

PART-10
仏教真理　五蘊無我

B6判　定価650円

わたしたち本来のものではない五蘊（形状、容姿、感覚、表象、経験の構成、識別）を我と錯覚し、迷妄に苦しむ人間。この五蘊を証智し超越することによって、わたしたちは人間を超え、神に至れるのである。

PART-11
自己を超えて神となれ！

B6判　定価820円

——大人気を呼んだ尊師大学講演会特集——。東大、京大をはじめ、九一年の大学祭で尊師が若者に、現代における宗教の存在意義等について語られた模様を一挙掲載。

PART-13
対談・インタビュー特集
（仮タイトル）
B6半　予価720円

（価格にはすべて消費税が含まれています。）

● 全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版
本　社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL.03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL.03(5370)1598

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

Enjoy Happiness

えんじょい・はぴねす

月刊『えんじょい・はぴねす』

――主な内容――

◆ Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて――えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◆ Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」 麻原彰晃尊師

◆ JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
――釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◆ Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」

◆ あなたもわたしも創造主

などなど、他の雑誌では絶対に見られない興味深い情報が満載！

「幸せになりたい！
でも、信徒になるのはちょっと……」
そんなあなたに贈る
最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期講読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できますし、全国や海外の本部・支部をいつでも利用できます。お気軽にオウムをのぞいてみませんか？

特典の一部を紹介すると……

- ◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。
- ◉幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！
- ◉成就者との対面および電話による悩み相談。
- ◉各種販売物を信徒価格で購入可。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（EH会員）になるには？

※入会金無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとEH会員となります。
なお、定期購読の申込みは6カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教本部・支部までお問い合わせください。

至福の未来をあなたの手に

オウム真理教 AUM SHINRIKYO

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

……などなど、様々な願いで頭がいっぱいのあなた。日本でただ一人の最終解脱者・麻原彰晃尊師率いるオウム真理教は、完璧な教義に裏付けられた最高の修行法で、あなたの夢を早く確実に実現します。素晴らしい未来を見つけに、あなたも気軽にオウム真理教の門を叩いてみませんか?

※資料請求券を貼付した八ガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

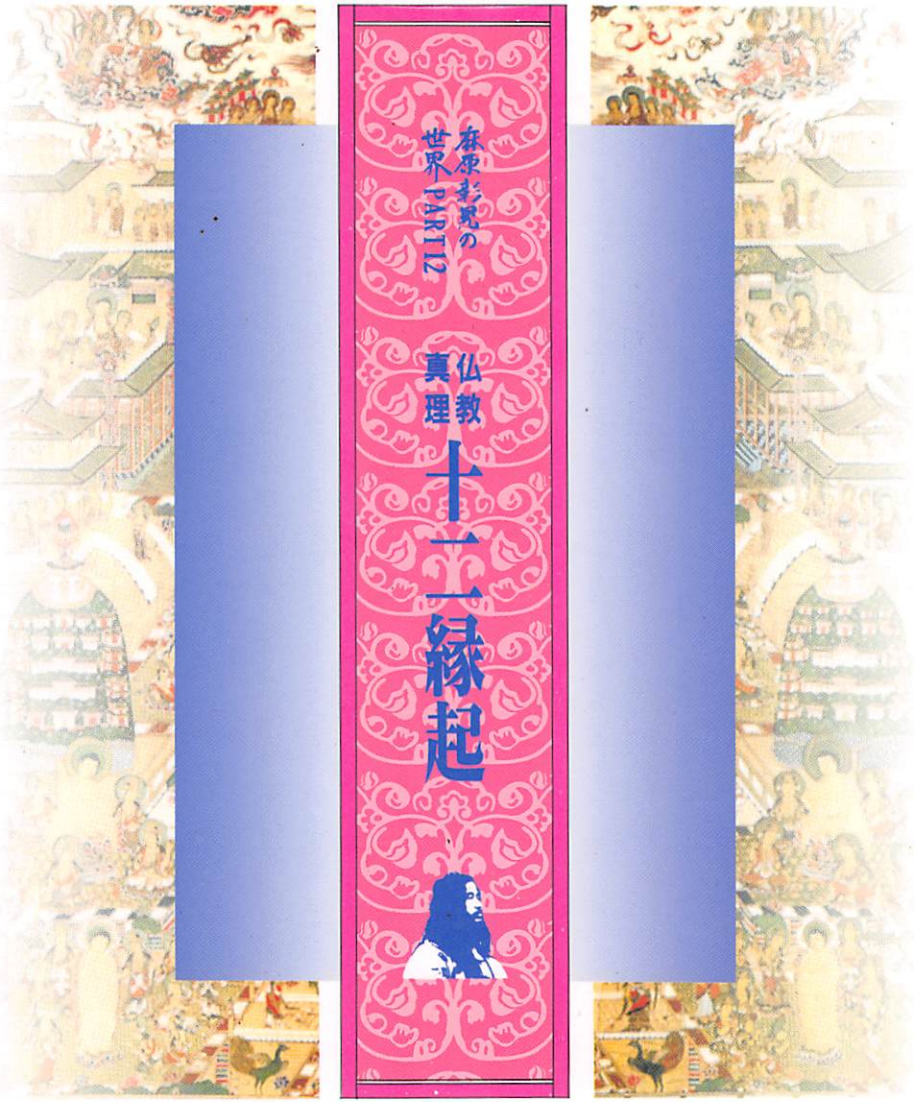
キリトリ線

麻原彰晃の世界 PART12

資料請求券

◆各道場のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03（3476）5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.＃2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1,　S.R.Germany

麻原彰晃の世界 PART12
『仏教真理　十二縁起』
1992年 2月23日　初版発行
定　価　620円（本体602円）
発行者　松本知子　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
〒154 東京都世田谷区世田谷2—8—17
電話　03（3439）6043　振替　東京2—109325
©Shoko Asahara 1992
ISBN4—87142—017—5　C0014　P620E
※乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。



ISBN4-87142-017-5 C0014 P620E 定価620円(本体602円)